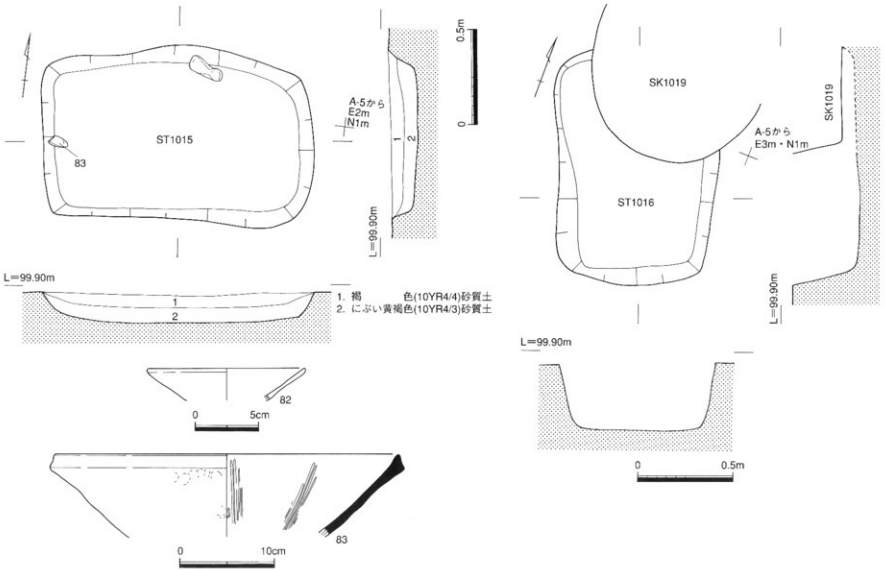
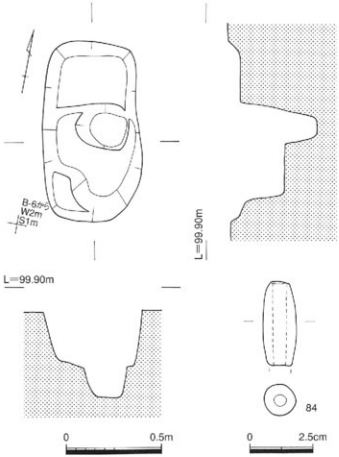


第48図　ST1015・1016遺構図・出土遺物



第49図　ST1017遺構図・出土遺物

土壙墓17号（ST1017）（第49図）

12・11区　A－5で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は不整形で段差を形成する。長軸0.94m、短軸0.52m、最大深度0.38mを測る。土層の堆積状況は、不明である。

遺物は土師質土器片、土錘、弥生土器片が出土し、土錘(84)のみ図化できた。

土壙墓36号（ST1036）（第50図）

9区　D・E－15で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.30m、短軸0.75m、最大深度0.10mを測る。覆土は、暗褐色砂質土1層である。

遺物は、土師質土器椀・杯・小皿・煮沸具片、須恵質土器椀・甕、青磁片、縄文晩期突帯文、焼土塊、砂岩製磨石が出土し、その中で土師質土器小皿（85）、錨運弁文が認められる青磁碗（86）、須恵質土器甕（87）、砂岩製磨石（S22）の4点が図化できた。85は底部回転ヘラ切りのちナデを施す。87は遺存状態が悪いものの、体部に格子目タタキを施す。S22は裏面が欠損し、表面の半分ほどに被熱痕が認められる。

土壙墓37号（ST1037）（第51図）

9区　D－16で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.50m、短軸0.95m、最大深度0.08mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土1層で、直径10～40cm大の結晶片岩を含む。また、にぶい黄褐色土ブロックを多く混入する。

遺物は土師質土器杯が出土したものの、図化できるものはなかった。

土壙墓49号（ST1049）（第51図）

2区　Z・AA－88で確認された土壙墓。平面形態・底面形態ともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.25m、短軸1.00m、最大深度0.28mを測る。覆土は概ね褐色を呈し、含有物から4層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1層）は暗褐色粘性砂質土で、下層（2～4層）は褐色粘性砂質土である。4層中、1・3層が地山ブロックを多く混入するが、1層が混入率が高い。

遺物は、土師質土器椀・羽釜・羽釜脚部、黒色土器椀、鉄滓が出土し、土師質土器羽釜2点(88・89)

が同化できた。88・89ともに1層からの出土で、しっかりした覆部をもつ。また88の体部には、煤状の炭化物が多量に付着する。

土壙墓54号（ST1054）（第52図）

1区　Z－92で確認された土壙墓。平面形態・底面形態ともに楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸0.78m、短軸0.58m、最大深度0.05mを測る。覆土は、にぶい黄褐色砂質土1層である。

遺物は、土師質土器杯（90）と人のものと思われる歯が出土した。90は底部回転ヘラ切りの後、粗い板ナデを施す。歯は写真のみで、実物の所在が不明なため鑑定できなかった。

土壙墓57号（ST1057）（第52図）

1区　AA－95でSA1010・ST1058に切られた状態で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸2.05m、短軸1.00m、最大深度0.44mを測る。覆土は概ね暗褐色を呈し、含有物の違いから5層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層（1層）は褐色粘性砂質土、中層（2～4層）は暗褐色粘性砂質土、下層（5層）はにぶい黄褐色砂質土である。4・5層は、地山ブロックを多く混入する。中層のなかで3層が、地山ブロックの混入率が一番低い。

遺物は、土師質土器片、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土したものの、小片のため図化できるものはなかった。

土壙墓58号（ST1058）（第53図）

1区　AA－95で確認された土壙墓。先述したST1057と、切り合い関係にある。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.85m、短軸0.58m、最大深度0.22mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はオリーブ褐色砂質土、2層は褐色砂質土である。2層中に、直径5～40cmの砂岩および結晶片岩を多く含む。遺物の出土は、認められなかった。

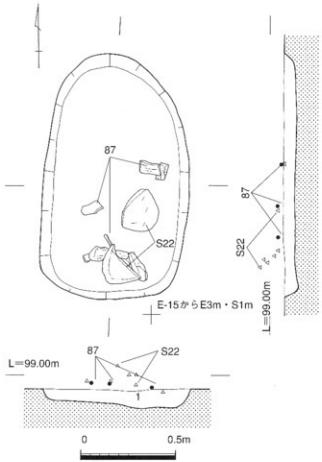
土壙墓60号（ST1060）（第53図）

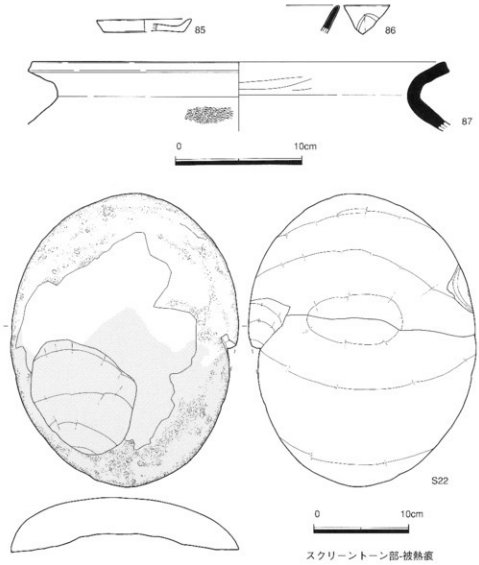
1区　BB－95で調査区北側溝に切られた状態で確認された土壙墓。またST1061と切り合い関係にあり、土層堆積状況からST1060が後出する可能性がある。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、最大長2.35m、短軸1.03m、最大深度0.54mを測る。覆土は16層に分層できるものの、大きく3層に分けることができる。上層（1・2層）は褐色砂質土、中層（3～7・9～16層）は概ね暗褐色を呈し、下層（8層）は暗褐色粘質土である。16層中、7・12層は地山ブロックを多く混入する。

遺物は、土師質土器杯・羽釜脚部、焼土塊、弥生土器片、サヌカイト製石鏃丁が出土し、土師質土器羽釜脚部（91）のみ図化できた。

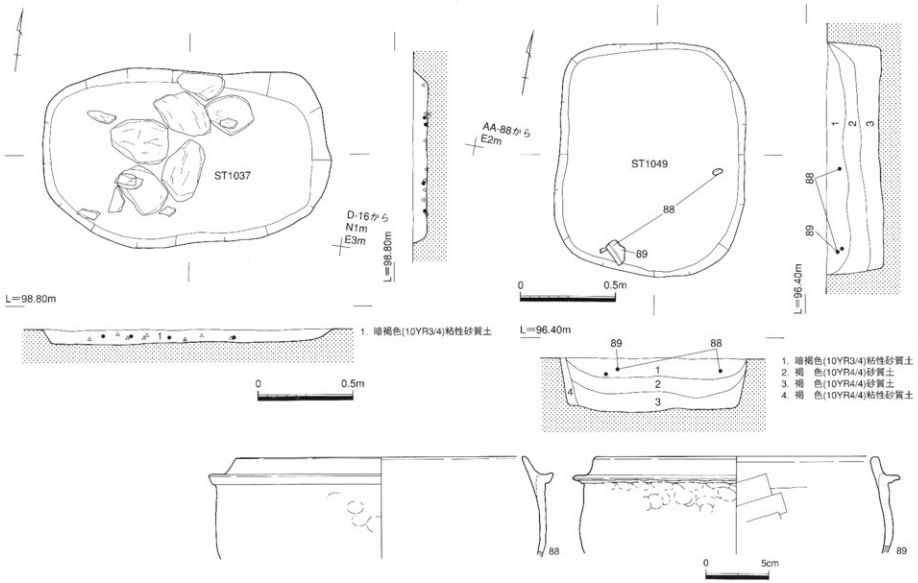
土壙墓68号（ST1068）（第54図）

1区　AA－99でSP11012に切られた状態で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は方形を呈し、長軸1.86m、短軸1.80m、最大深度0.34mを測る。覆土は11層に分層でき、大

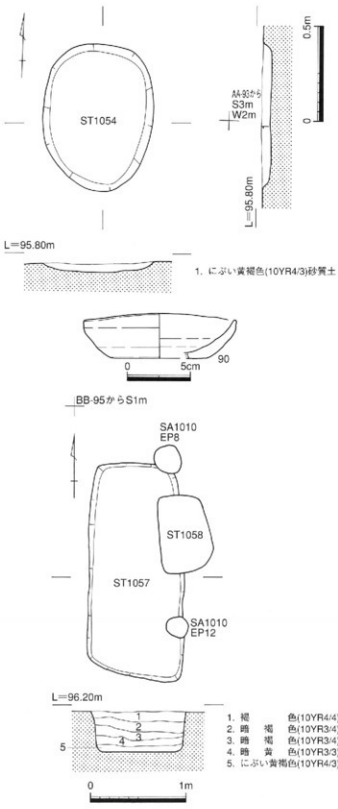




第50図　ST1036遺構図・出土遺物



第51図　ST1037・1049遺構図・出土遺物



第52図　ST1054・1057遺構図・出土遺物

きく２層に分けることができる。上層（１・２層）は褐色を呈し、２層が粘性が強い。下層（３～９層）は概ね暗褐色を呈し、５・９層は地山ブロックをやや多く混入する。

遺物は土師質土器片、弥生土器片が出土したものの、小片のために図化することはできなかった。

土壙墓71号（ST1071）（第54図）

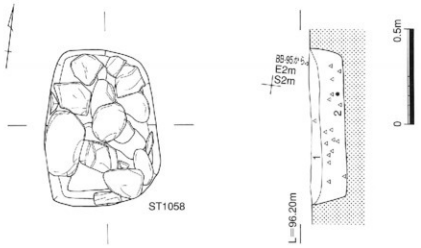
１区　BB－100で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.19m、短軸0.65m、最大深度0.25mを測る。覆土は２層に分層でき、１層は褐色砂質土、２層はにぶい黄褐色砂質土である。また１・２層中に、直径10～50㎝の砂岩および結晶片岩を多量に含む。

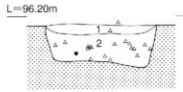
遺物の出土は、認められなかった。

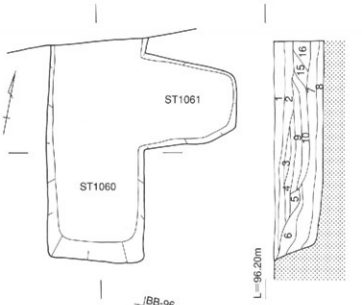
土壙墓89号（ST1089）（第55図）

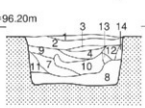
１区　AA－111で確認された土壙墓。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は方形を呈し、長軸2.05m、短軸1.05m、最大深度0.40mを測る。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈するが、９層に分層できる。また大きく、上層（１～４・６～８層）と下層（５・９層）に分けることができる。５層はしまりが弱く、また堆積状況から棺の痕跡と思われる。また９層中、３層が地山ブロックを多く混入する。

遺物の出土は、認められなかった。





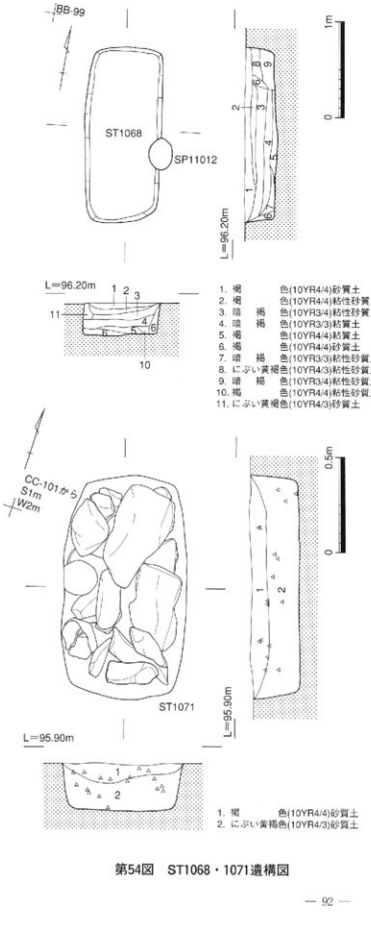




0　5cm

1. 褐　色(10YR4/4)砂質土
2. 褐　色(10YR4/4)砂質土
3. 暗　褐　色(10YR4/6)粘性砂質土
4. 暗　褐　色(10YR3/4)粘性砂質土
5. 暗　褐　色(10YR3/4)粘性砂質土
6. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
7. 褐　色(10YR4/6)粘質土
8. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
9. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
10. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
11. 褐　色(10YR4/4)砂質土
12. 褐　色(10YR4/4)粘性砂質土
13. 暗　褐　色(10YR3/4)粘性砂質土
14. 暗　褐　色(10YR3/4)粘性砂質土
15. 褐　色(10YR4/4)砂質土
16. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土

第53図　ST1058・1060遺構図・出土遺物



第54図　ST1068・1071遺構図

土壙墓90号（ST1090）（第55図）

1区　AA－111・112で確認された土壙墓。遺構の一部が、調査区外に延びる。平面形態・底面形態はともに長方形、断面形態は舟底形を呈し、長軸1.84m、短軸1.10m、最大深度0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色を呈し、含有物の違いから2層に分層できる。2層は、1層と比較してしまりが強い。

遺物の出土は、認められなかった。

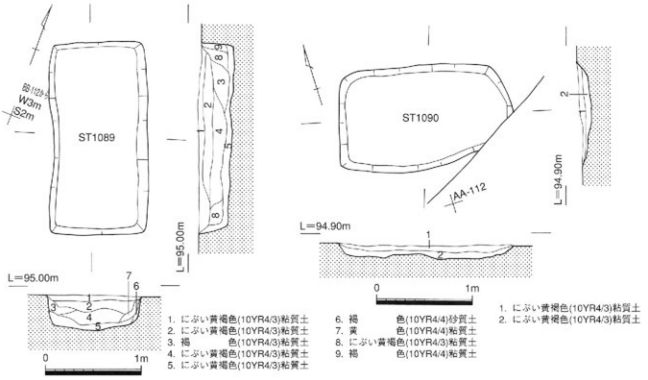
集石遺構

集石遺構1号（SU1001）（第56～59図）

1区　Y・Z－73・74でSR1009の東肩で確認された集石遺構。検出状況から、調査区北側にさらに延びるものと思われる。遺構検出時に平面プランが確認されていないことから、SR1009に伴う可能性も考えられる。また集石の出土状況から、面をそろえて構築したようには認められなかった。

集石が確認された範囲は、長軸4.50m、短軸3.50m、最大深度0.14mを測る。覆土は黄褐色を呈し、含有物の違いから2層に分層できる。1層は、炭化物を若干含む。

遺物は、土師質土器椀・煮沸具片、須恵質土器椀・こね鉢・甕、弥生土器甕、サヌカイト剥片・石核、磨製石斧、敲石、磨石が出土し、そのうち図化できたのは土師質土器椀（92）、須恵質土器甕（93・95）・片口こね鉢（94）、磨製石斧（S23）、敲石（S24～27）、砂岩製磨石（S28・29）の11点である。93は十鹿山産に形態は近いが、在地の可能性も考えられる。94は破損し、2m四方に散在した状態で出土した。接



第55図　ST1089・1090遺構図

合を行うと、部分的な欠損はあるものの完形にちかい復元となった。S23は未製品で、砂岩を石材に用いる。敲石4点のうち、S24は結晶片岩を、S25は砂質片岩を、S26は砂岩を、S27は凝灰岩を石材として用いる。S24・26は完形で、またS26は敲打痕以外に凹痕が表面に認められる。S28は2ヶ所に被熱痕が認められ、その内の一つは表面から裏面にかけての広範囲に熱を受けていることが確認できた。

不明遺構

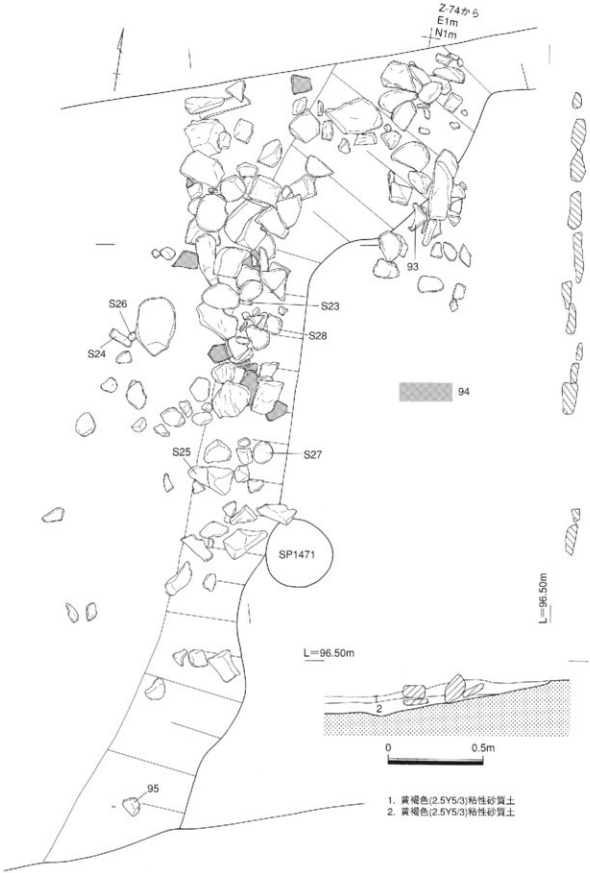
不明遺構2号（SX1002）（第60図）

12・11区　A－0で調査区北側溝に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は長方形、断面形態は不整形を呈し、最大長1.74m、短軸1.22m、最大深度0.22mを測る。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色砂質土、2層は黒褐色粘性砂質土で炭化物を含む。

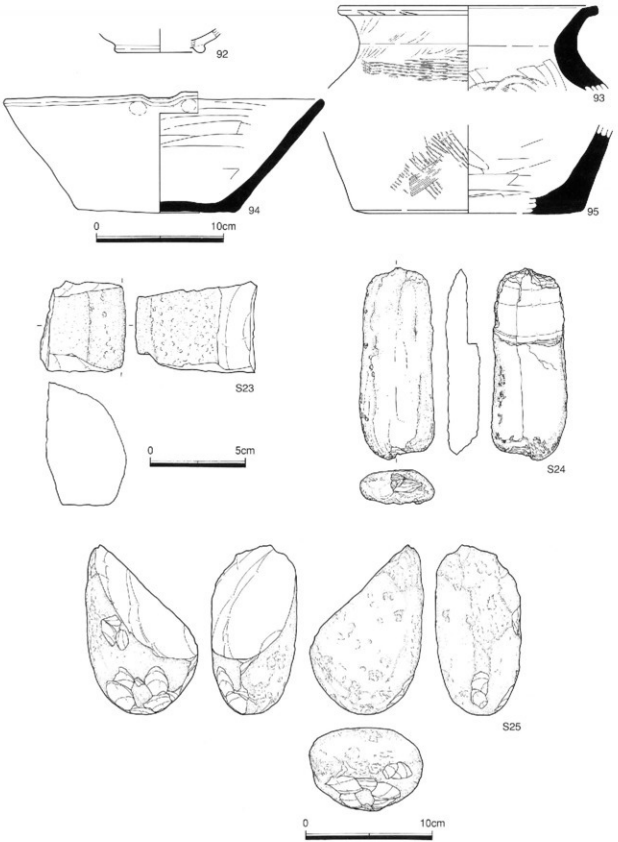
遺物は土師質土器杯、須恵質土器椀、砥石、弥生土器片が出土し、そのうち図化できたのは底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯（96）のみである。

不明遺構7号（SX1007）（第60図）

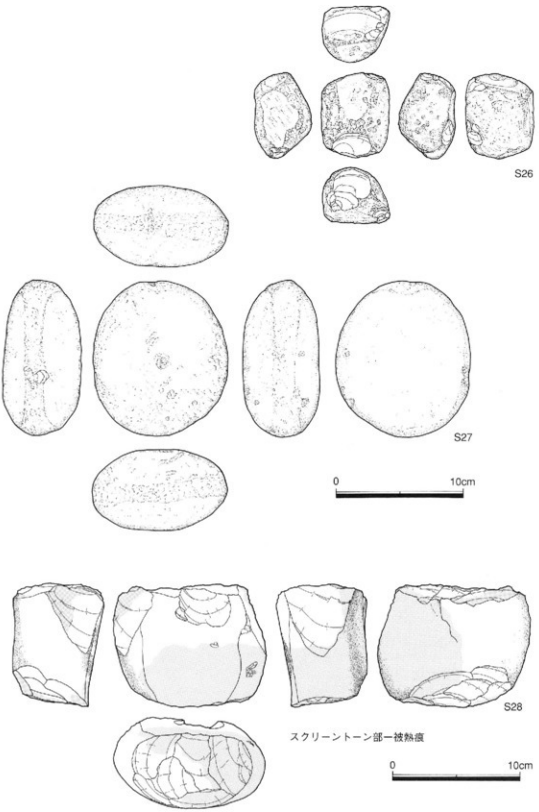
12・11区　A・B－4・5でSP1054に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は長方形、断面形態は不整な舟底形を呈し、長軸3.20m、短軸1.56m、最大深度0.26mを測る。覆土は3層に分層でき、1層は褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄褐色粘性砂質土、3層はオリーブ褐色粘性砂質土である。



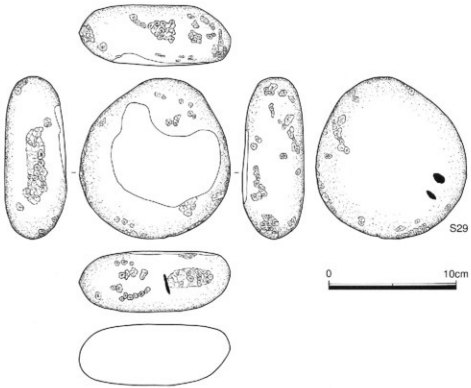
第56図　SU1001集石検出状況図



第57図　SU1001出土遺物(1)



第58図　SU1001出土遺物(2)



第59図　SU1001出土遺物[3]

遺物は土師質土器杯、壁土が出土し、そのうち図化できたのは土師質土器杯（98・99）2点である。98と99は別個体であり、99は底部静止糸切りで、胎土が灰白色を呈する。98は、外面に煤が付着する。

不明遺構10号（SX1010）（第60図）

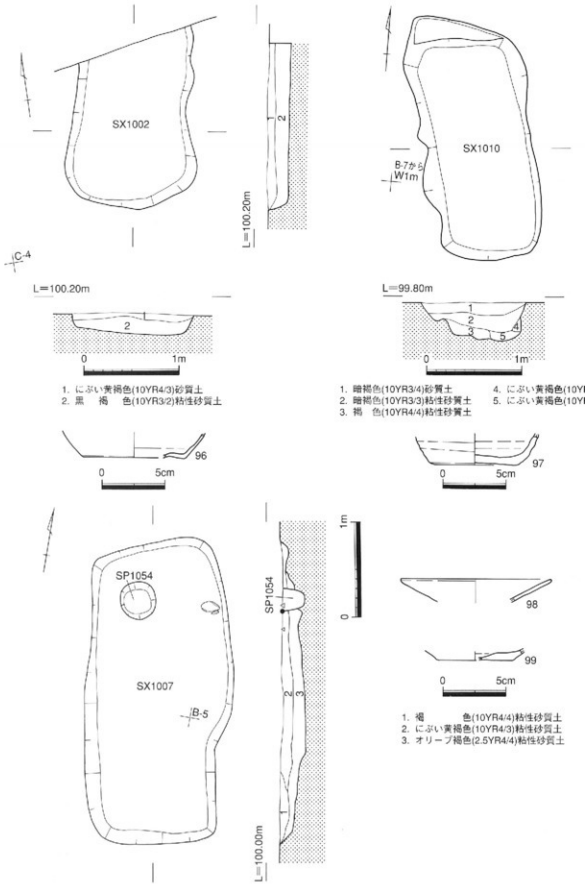
12・11区　A・B－6・7で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は不整な長方形、断面形態は不整形を呈し、長軸2.52m、最大幅1.22m、最大深度0.30mを測る。覆土は5層に分層でき、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は暗褐色を呈し、下層（3～5層）はにぶい黄褐色を呈する。上層中1層に地山ブロックがやや多く混入し、下層では全般的にやや多く混入する。

遺物は土師質土器椀・杯、弥生土器甕、サヌカイト剥片が出土し、そのうち図化できたのは底部回転ヘラ切りを施す土師質土器杯（97）のみである。

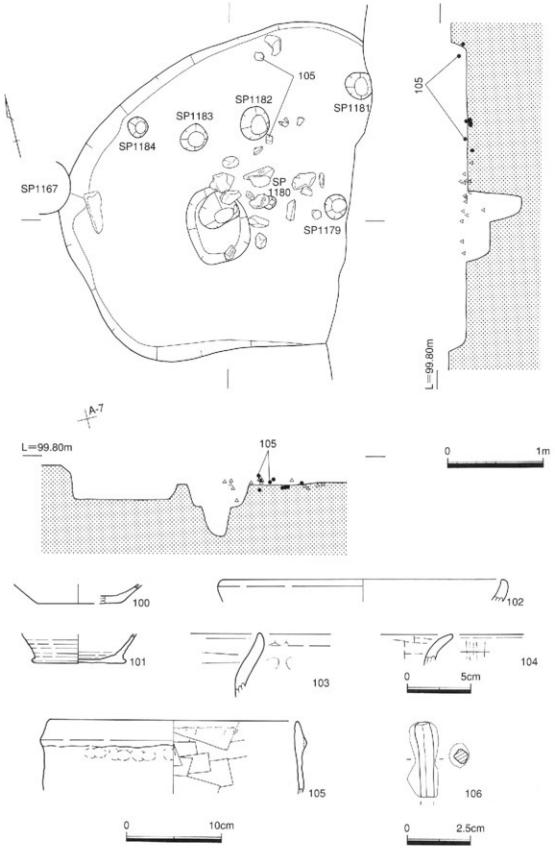
不明遺構13号（SX1013）（第61図）

12・11区　A－7でSP1167・1171に切られた状態で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は不整な円形、断面形態は不整形を呈し、長軸3.92m、最大幅2.98m、最大深度0.18mを測る。土層堆積は、不明である。覆土除去後、床面上に柱穴7基を確認したが、SX1013より古い遺構と思われる。

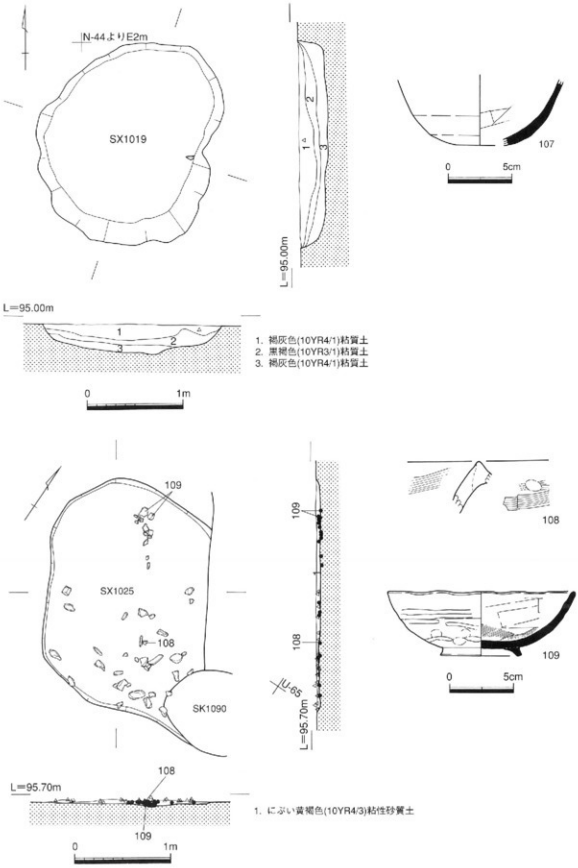
遺物は土師質土器杯・鍋・羽釜・こね鉢・擂鉢・壺？、須恵質土器椀・壺、焼締陶器、鉄釘、鉄滓、砥石、焼土塊、炭化物が出土し、そのうち図化できたのは土師質土器杯（100・101）、こね鉢（102）、鍋（103）、壺？（104）、羽釜（105）、断面方形を呈する鉄釘（106）の7点である。100は不明だが、101



第60図　SX1002・1007・1010遺構図・出土遺物



第61図　SX1013遺構図・出土遺物



第62図　SX1019・1025遺構図・出土遺物

は底部回転ヘラ切りである。105は、床面直上からの出土である。

不明遺構19号（SX1019）（第62図）

6－1区　M－44で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は不整楕円形、断面形態は舟底形を呈し、長軸2.20m、短軸1.90m、最大深度0.32mを測る。覆土は概ね褐灰色を呈し、含有物から3層に分層できる。2層は黒褐色を呈し、褐灰色土ブロックを混入する。また3層は、地山ブロックを混入する。

遺物は須恵質土器椀、弥生土器片、凹基式のサヌカイト製石鏃が出土し、そのうち図化できたのは須恵質土器椀（107）のみである。107は、高台を貼り付けた痕跡が認められない。

不明遺構25号（SX1025）（第62図）

4－2区　U・V－61でSK1090に切られた状態で確認された不明遺構。さらに調査区外に拡がる。平面形態・底面形態は不整な楕円形、断面形態は不整舟底形を呈し、最大長1.78m、短軸2.12m、最大深度0.04mを測る。覆土はにぶい黄褐色粘性砂質土1層で、土器片と共に直径5～20cm大の礫を含む。

遺物は土師質土器椀・杯・鍋、黒色土器椀、須恵質土器椀・甕、壁土、須恵器片、弥生土器高坏・鉢、結晶片岩製叩石が出土し、そのうち図化できたのは土師質土器鍋と考えられる土器片（108）と須恵質土器椀（109）の2点のみである。109は、外面では高台貼り付け時の回転ナデの痕跡は認められないが、高台の内側は回転ナデを施す。

不明遺構26号（SX1026）（第63図）

2区　Z－86で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸3.10m、短軸1.64m、最大深度0.40mを測る。覆土は、不明である。遺物は直径5～30cm大の礫と共に出土し、南東側では遺物と礫の出土位置は高いものの、北西側では床面直上となる。

遺物は陶器甕・鉢、土師質焙烙、土師質土器こね鉢、備前と思われる陶器片が出土し、そのうち図化できたのは陶器鉢（110）、土師質焙烙（111・112）の3点である。110は、5m程東に離れたSK1103から出土した土器と接合している。

包含層（第64～73図）

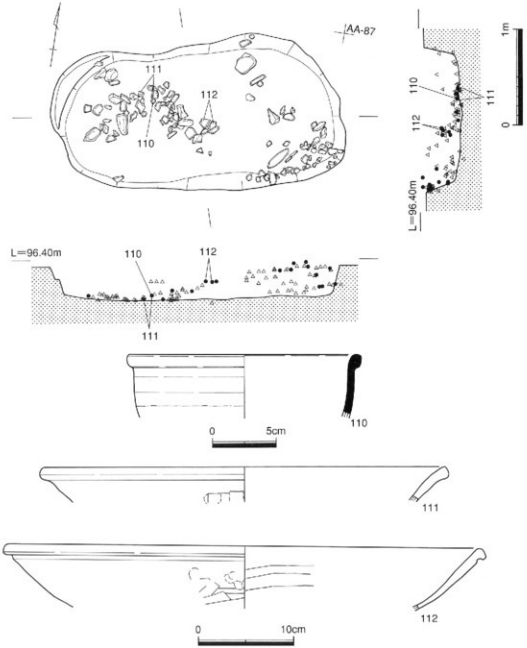
包含層出土遺物のうち、土器93点、土製品2点、石器32点、鉄器7点の計134点を図化した。縄文土器・弥生土器は概ね12・11区から出土し、弥生土器の場合、遺構の検出状況に比例しているといえる。出土遺物の量は、中世遺物が大半を占める。

縄文土器（第64図）

縄文土器（113・114）は、ともに12・11区からの出土である。113の外面は剥離のため調整不明瞭だが、縄文（RL）がわずかに残る。また、胎土に角閃石を含む。114は口端端部に斜め方向の刻目、体部に縄文（RL）を施す。内面は、ナデ調整である。胎土に、結晶片岩・チャートを含む。

弥生土器（第64図）

弥生土器（115～120）は、広口壺（115～117）・底部（119）、甕（118・120）の6点図化できた。壺



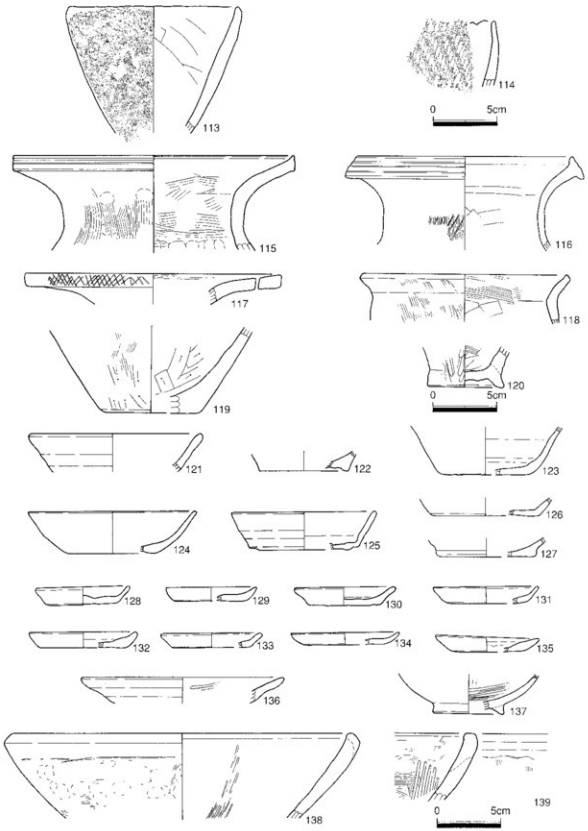
第63図　SX1026遺構図・出土遺物

は口縁端部をそのまま方形に治めるもの（117）、また端部を上方（115）、あるいは上下方向（116）に拡張し端面を形成するものがある。115・116は口縁部端面に凹線を、117は斜格子文を施す。また116は、頸部に板状工具による刺突文を施す。底部（119）は、平底である。

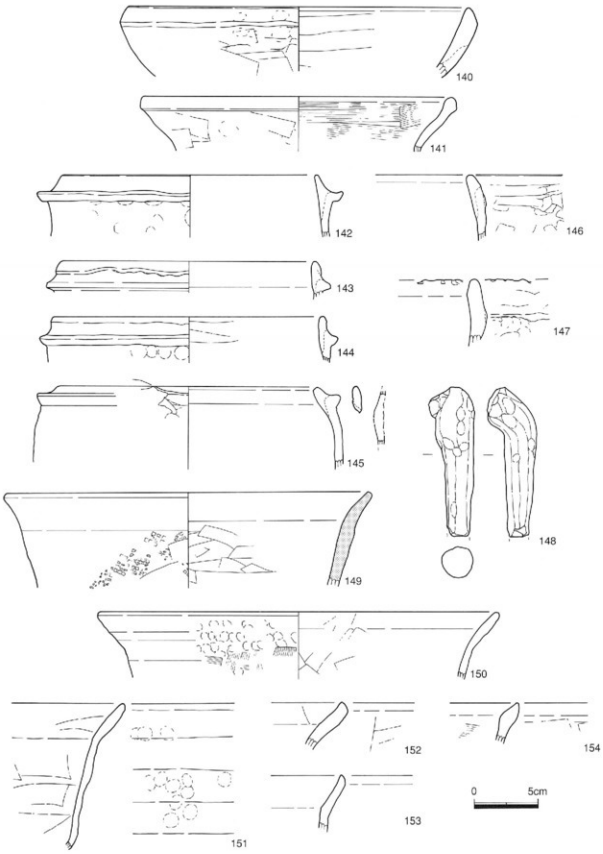
甕（118・120）は、くの字口縁を持つもの（118）と上げ底（120）の2点図化できた。118は口縁端部を方形に収め、上方に若干拡張する。

中世遺物（第64～67図）

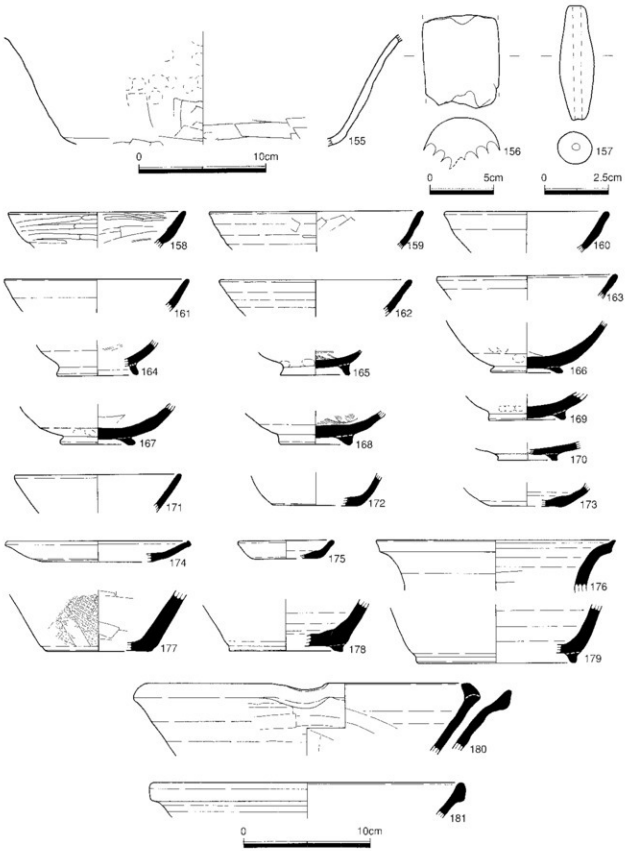
中世遺物は、土師質土器椀（121・122）・杯（123～127）・小皿（128～135）、黒色土器皿（136）・椀



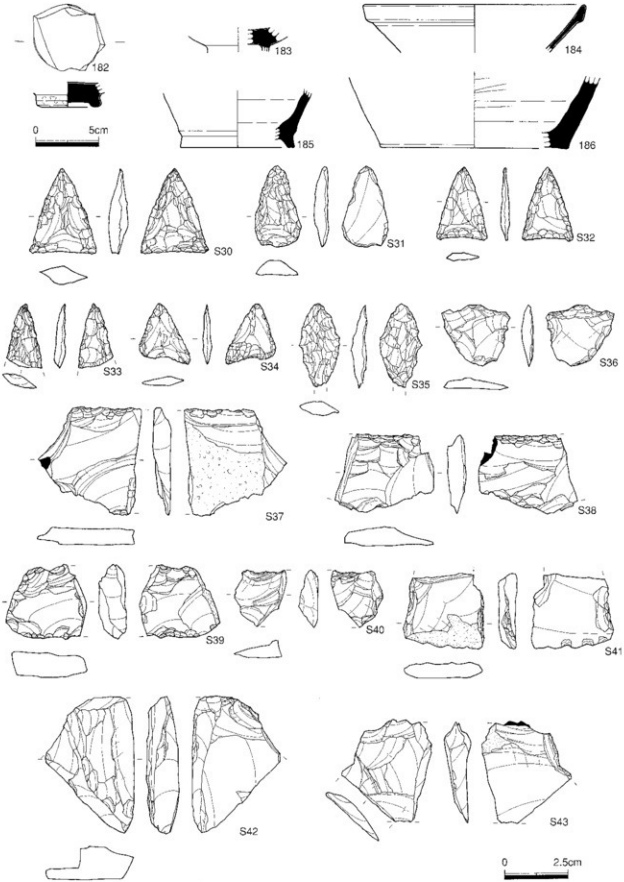
第64図　包含層出土遺物（土器）(1)



第65図　包含層出土遺物（土器）(2)



第66図　包含層出土遺物（土器）(3)



第67図　包含層出土遺物（土器・石器）

（137）、土師質土器擂鉢（138・139）・こね鉢（140・141）・羽釜（142～148）・鍋（150～155）、瓦質鍋（149）、羽口（156）、土錘（157）、須恵質土器椀（158～170）・杯（171～173）・小皿（175）・壺（176）・甕（177）・瓶（178・179）・こね鉢（180・181）、須恵器皿（174）、青磁碗（182・183）、白磁碗（1847）、陶器壺（185・186）の計66点が図化できた。

供膳具のうち土師質土器椀の出土量は少なく、2点図化できたのみである。122の外面は杯のように見えるが、断面三角形を呈する高台を持つ。図化できた杯5点は、ともに底部回転ヘラ切りを施す。また124・125は体部が外上方に開きながら立ち上がり、器高が3cm前後におさまる。126・127も同様の形態を持つ可能性がある。小皿は8点図化でき、杯と同様に底部は回転ヘラ切りを施す。小皿は体部が外上方に開き、口縁端部を丸くあるいはやや尖りぎみに収める。136・137は黒色土器で、2点ともに遺存状態が悪いものの内面のみに炭素を吸着させ、ミガキを施す。

土師質土器擂鉢は2点図化でき、138は内面に使用痕が、139は外面に炭化物の付着が認められる。こね鉢も2点図化でき、140の粘土には角閃石と金雲母が認められることから、讃岐から搬入した可能性がある。羽釜は口縁部6点、脚部1点の計7点が図化できた。142はしっかりした鍔部をもち、また鍔部成形時のユビオサエ痕が明瞭に残る。145は欠損するものの、把手部をもつ。146・147の2点は退化した鍔部をもち、146は外面に炭化物が若干付着する。鍋は7点図化でき、149は瓦質、残り6点が土師質土器である。150では外面と口縁部内面の一部に、155では内外面共に体部下位から底部にかけて煤状の炭化物が付着する。土錘は、ほぼ完形である。

須恵質土器椀は13点図化でき、そのうち内面にミガキを施すものは158・164・165の3点である。160には、口縁部外面に重ね焼きによる黒色帯が認められる。杯は3点、小皿は1点図化でき、底部は回転ヘラ切りのあと板ナデを施す。

須恵質土器壺・甕ともに各1点図化でき、176は口縁部内外面に自然釉がかかる。177は格子目タタキが施される。こね鉢は図化できた2点ともに、口縁部外面のみに自然釉がかかる。

182・183は青磁碗で、182は加工円盤である。184は、いわゆる玉縁口縁と呼ばれる口縁部を持つ白磁碗で、森田・横山編年の碗Ⅳ類にあたる。185・186は陶器甕で、産地は備前と思われる。

石器（第67～69図）

図化できた石器は、石鏃7点（S30～36）、楔形石器7点（S37～43）、削器2点（S44・46）、石錘1点（S45）、敲石1点（S47）、石斧1点（S48）、サヌカイト剥片7点（S49～55）の計26点である。

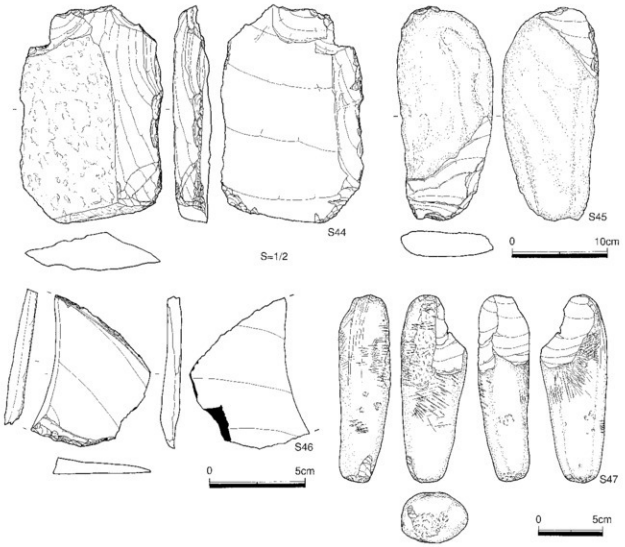
石鏃を基部から分類すると、S30～33は平基三角、S34は凹基式、S35は凸基式となる。また、S36は未製品である。石材にS31は結晶片岩を、他の6点はサヌカイトを用いる。

図化できた楔形石器7点は、サヌカイトを使用石材として用いる。削器は2点共にサヌカイトの縦長剥片を使用し、S44は平刃・単刃を、S46は右側縁部が欠損するものの凸刃・複刃をもつ。石錘は打欠石錘で、結晶片岩を用いる。敲石は砂岩を用い、表面と下側面の2面に敲打痕と擦痕が認められる。

西州津遺跡で出土した石斧は、SU1001出土分を含めて2点である。S48は上半部が欠損した未製品で、斑糲岩を用いる。

鉄製品（第70図）

鉄製品は、5点（187～191）図化できた。187・188は遺存状態が悪いものの、断面方形を呈する鉄釘



第68図　包含層出土遺物（石器）(1)

である。190・191は不明鉄製品で、190は下部が欠損、191は一部欠損している。

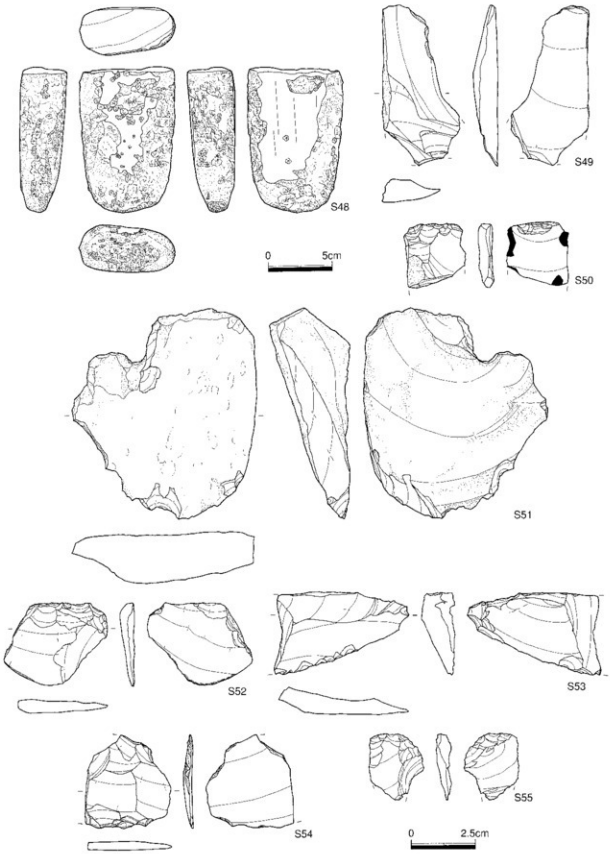
側溝出土遺物（第71図）

側溝出土遺物として、須恵質土器椀（192）・甕（193）、サヌカイト剥片（S56）、鉄製鎌（194）の4点が図化できた。192・S56は4－1区、193は4－2区、194は2区からの出土である。192の外面は部分的にユビオサエの痕跡が認められるが、全体的に回転ナデを施して表面を平滑に仕上げようとする。

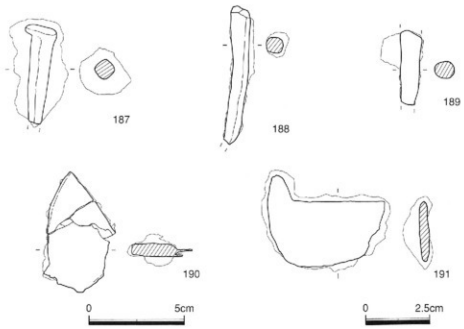
試掘トレンチ出土遺物（第72図）

試掘調査の際に出土した遺物のなかで、縄文土器片（195）、土師質土器杯（196・197）・小皿（198・199）、青磁椀（200）、楔形石器（S57）、砥石（S58）、両端部が欠損した鉄製鉇（201）の9点が図化できた。

195は遺存状態が悪いものの、口縁端部に刻目をもつ縄文土器と思われる。杯2点共に底部回転ヘラ



第69図　包含層出土遺物（石器）(2)



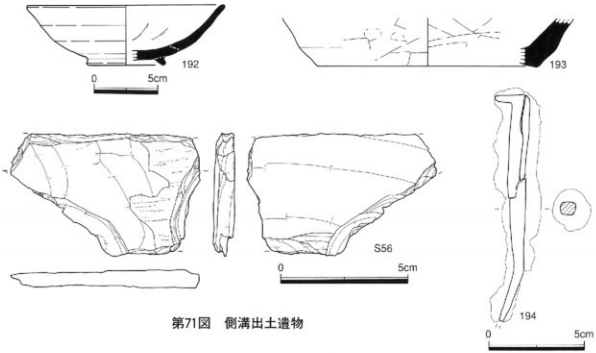
第70図　包含層出土遺物（鉄製品）

切りで、196の内面には炭化物の付着が認められる。小皿も２点共に底部回転ヘラ切りである。198は回転ナデのあと、内面見込み部と底面の中央部のみ板ナデを施す。また198は内面に、199は外面に炭化物の付着が認められる。200は、綿蓮弁文をもつ。石器２点の石材は、S57はサヌカイトを、S58は明確に判断できないが頁岩を使用か。

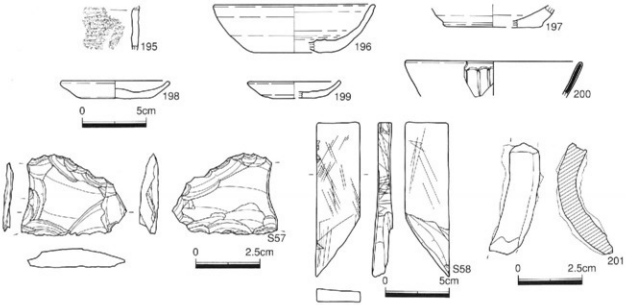
機械掘削出土遺物（第73図）

機械掘削の際に出土した遺物のなかで、土師質土器杯（202～205）・小皿（206～208）・羽釜（209・210）・脚部（213）・鍋（211・212）、須恵質土器椀（214）、サヌカイト製楔形石器（S59）、石鏃（S60）、サヌカイト剥片（S61）の16点が図化できた。

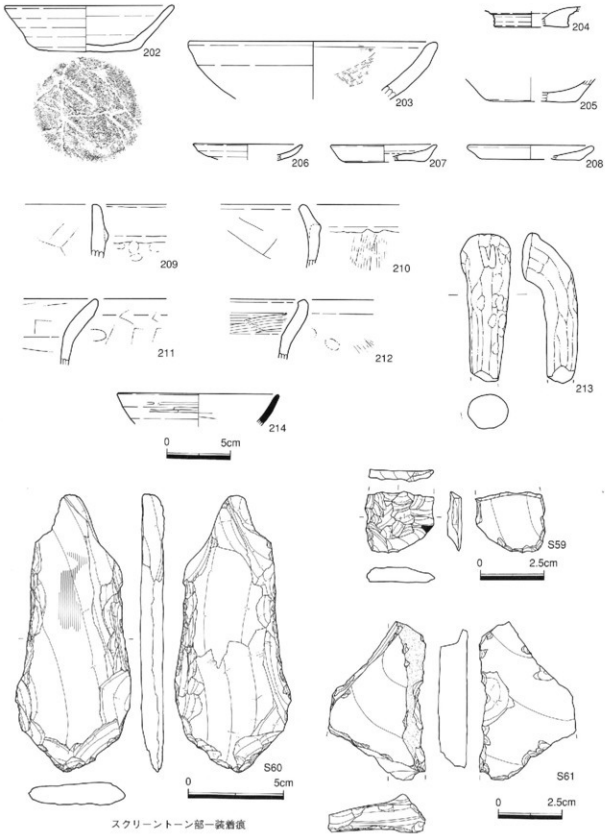
図化できた杯・小皿のうち、底部が遺存しているなかで204をのぞく４点は底部回転ヘラ切りである。208は、内面に炭化物が付着する。羽釜は２点共に退化した鍔部をもち、209の外面体部には炭化物の付着が認められる。鍋のうち、212は胎土に角閃石・金雲母が含まれることから、讃岐からの搬入品の可能性がある。S60は結晶片岩を使用し、装着痕が認められる。



第71図　側溝出土遺物



第72図　試掘トレンチ出土遺物



第73図　機械掘削出土遺物

Ⅳ　東州津遺跡

1　調査の経過

東州津遺跡	試掘一次	平成11年4月6日～平成11年4月30日
	試掘二次	平成12年2月7日～平成12年2月8日
	一次調査	平成11年5月3日～平成11年5月31日
	二次調査	平成13年1月4日～平成13年3月30日
	三次調査	平成14年1月4日～平成14年2月28日
	四次調査	平成14年11月1日～平成14年12月26日

(1)　調査の経過

東州津遺跡は、調査対象地の用地取得状況等から試掘調査は2回に分けて行われることになり、試掘一次調査は平成11年4月6日～4月30日の19日間に、試掘二次調査は平成12年2月7日～2月8日の2日間にそれぞれ実施した。重機掘削によるトレンチ掘りで、試掘一次調査では対象面積600㎡につき30㎡を、試掘二次調査では1,660㎡につき80㎡の調査を行った。

また上記以外の試掘未調査部分については、当時センターで速やかな対応が困難であったため、徳島県教育委員会文化財課により、平成12年度の6月と10月の2回に分けて試掘調査が実施され、包含層・遺構面を確認している。文化財課による試掘調査の範囲は、試掘一次調査で行った対象地の中間部分にあたり、99－1区を除いた調査区である

試掘一次調査では、調査対象地の東側と西側(西側には99－1区が含まれる)を中心に試掘を行った。その結果、東側では地表面から0.8mまで廃材が混入した整地層で、包含層・遺構面共に確認できなかった。しかし西側では弥生時代の溝・遺物を確認したことから、そのまま99－1区の本調査へ移行した。

試掘二次調査は99－1区の西隣の調査を行い、遺構面の拡がりを把握するのに務めた。しかし、包含層・遺構面ともに確認できず、本調査には至らなかった。

用地の取得状況から、本調査は短期間の調査が複数年にまたがることとなった。調査は平成11年4月2日から始まり、平成14年12月31日に終了した。調査期間は、平成11年度では4月2日～5月31日のほぼ2ヶ月間、平成12年度では平成13年1月1日～3月31日までのほぼ3ヶ月間、平成13年度では平成14年1月4日～4月28日までのほぼ4ヶ月間、平成14年度では平成14年11月1日～12月31日までのほぼ2ヶ月間である。また調査面積は平成11年度で300㎡、平成12年度で990㎡、平成13年度で714㎡、平成14年度で345㎡となり、発掘調査総面積は2,349㎡を数える。

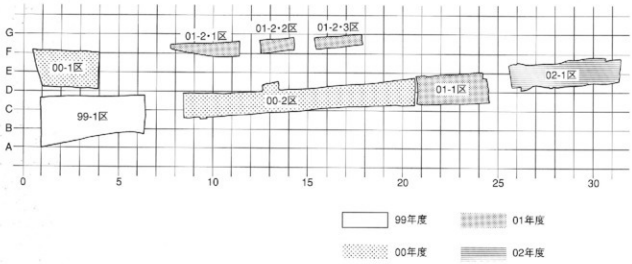
(2)　発掘調査の方法

調査を始めるにあたり、グリッドの配置を発掘調査統一基準にならい次のように設定した。第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込み、南西隅を基準として北にA、B、C……、東に1、2、3……の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表している（第74図）。

調査区の設定は、その間を横切る道路や用水路などの保守の必要性があるもの、および地形を考慮した上で便宜上田畑・宅地などの現地割りのまとまりごとに行った。先述したように、用地取得状況等の理由から調査期間が複数年にまたがっていることにより、調査区名が重複している。調査区名を振り直

すことも考えたが、混乱を招く恐れもあるため調査時のまま踏襲し、調査区の前に調査年度をつけて判別できるようにした。

また遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後に遺構の確実性が乏しいと判断されたものは欠番としている。これは遺構記号・番号の変更による混乱を避ける目的であり、変更は必要最低限にとどめた。遺構番号はそれぞれ調査区内で通しで付与されているものの、整理の段階で遺構記号の変更に伴い、すべての遺構に対して遺構番号を新たに振り直している。



第74図　東州津遺跡グリット配置図

(3)　調査日誌抄

＜1次調査＞

1999年

4月2日　調査準備。
4月8日　試掘調査開始。
4月30日　試掘調査終了。
5月7日　調査準備・物品搬入。

写真1　SD1001掘削作業

5月12日　機械掘削開始。
5月18日　人力掘削開始。
5月19日　遺構検出開始。
5月21日　遺構掘削開始。
5月29日　写真撮影。
5月31日　調査終了。

＜2次調査＞

2001年

1月4日　調査準備。
1月5日　1区機械掘削開始。
1月9日　2区機械掘削開始。1区人力掘削開始。
1月11日　1区遺構検出開始・2区人力掘削開始。
1月15日　1区遺構掘削開始。

1月29日　1区写真撮影。
2月1日　1区埋め戻し。
2月5日　2区第1遺構面遺構検出。
2月8日　2区第1遺構面遺構掘削。

写真2　積雪状況

2月15日　2区写真撮影。
2月16日　2区確認掘り。
2月19日　2区延長部の機械掘削・人力掘削。
2月21日　2区延長部遺構検出・写真撮影・遺構掘削開始。
2月23日　2区延長部写真撮影・確認掘り。
2月27日　2区西側延長部第2遺構面検出。
2月28日　2区第2遺構面遺構掘削開始。
3月2日　2区第2遺構面写真撮影。
3月5日　2区埋め戻し・整地・図面整理。
3月28日　調査終了。

＜3次調査＞
2002年
1月4日　調査準備。
1月7日　物品搬入。
1月8日　機械掘削開始。
1月10日　人力掘削開始。
2月12日　部分的な試掘調査。
2月18日　1区埋め戻し開始。
2月22日　2区埋め戻し開始。
2月28日　調査終了。

＜4次調査＞
2002年
11月1日　調査準備。
11月5日　物品搬入。
11月6日　機械掘削開始。
11月11日　一部人力掘削開始。

写真3　作業風景

11月12日　西部地区機械掘削終了。
11月13日　東部地区機械掘削開始。
11月18日　事務所に空き巣が入る。午前中は警察の現場検証、午後から機械掘削のみ行う。
11月19日　機械掘削終了。東部地区人力掘削開始。
11月26日　遺構検出開始。
11月27日　作業道具入れ用のプレハブに空き巣が入る。現場検証。
11月29日　写真撮影。
12月2日　遺構掘削開始。
12月18日　空中写真撮影。
12月26日　調査終了。

2　調査成果

1．基本層序

本遺跡は前述の通り、標高80～90mの河岸段丘上に位置する。調査対象地は、南流する鮎苦谷川の半扣な東側段丘上に占地し、調査区の東端から西端までは約155mを測る。

調査前は宅地・工場跡および田畑で、田畑および宅地造成に伴う削平もしくは盛土などの土地改変が行われている。現在の土地利用によって異なるものの、基本的には表土、攪土、遺構面として捉えた自然堆積層の層序となる。

本遺跡の上層堆積の観察は、基本的に各調査区の四壁について行った。しかし各調査区によって土層断面の記録方法は異なり、全面記録もしくは東西または南北の任意の壁での記録にとどめている調査区もある。報告にあたっては、これらの記録から各調査区での平均的な上層堆積をもとに柱状模式図を作成し、各調査区ごとの基本層序について述べる。（第75～77図）

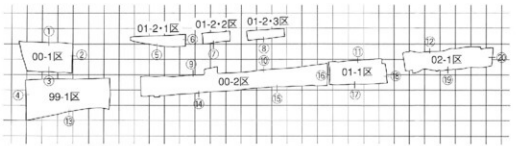
00－1区および99－1区の現況は宅地および工場跡であり、宅地造成に伴う部分的な削平を受けながらも弥生時代の溝、鎌倉・室町時代の溝・柱穴が確認できた。基本層序は概ね撹乱上直下は遺構面となるが、遺構面である自然堆積層は場所によって、褐色あるいはにぶい黄褐色を呈する。99－1区では、撹乱土直下は暗灰黄色砂質土の自然堆積層が拡がる。3層以下はシルトとなり、3・4層は粘性をおびる。00－1区では、撹乱土と自然堆積層との間に盛土であるにぶい黄褐色粘性砂質土が認められる。

00－2区は今回の調査対象地の中で一番広い面積をもち、現況は田畑である。基本層序は概ね撹乱、現耕作土、床土、盛土、包含層、褐色あるいは黄褐色の自然堆積層となる。調査区西側では暗褐色および黒褐色粘性砂質土の包含層が認められるものの、西壁から東へ向かって33m付近の北壁土層堆積状況では、この包含層を切るような形で黒褐色粘質土が東側へ拡がる。この黒褐色粘質土は東へ行くにつれて厚くなり、東端では厚さ50cmを測る。また部分的に、この調査区でのみ第二遺構面を確認した。第二遺構面は第76図⑨の9層（にぶい黄褐色粘質土）が該当し、調査区西端から約20m程の範囲に拡がる。

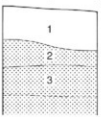
01－1区では、鎌倉・室町時代の柱穴および自然流路が確認された。調査区の北半分を自然流路が占め、調査区内ではその南肩の確認にとどまる。層序は、概ね撹乱、現在の耕作土、盛土、黒褐色粘質土、にぶい黄色あるいは灰黄褐色を呈する自然堆積層となる。自然堆積層の直上に認められる黒褐色粘質土は2ないしは3層に分層でき、流路内堆積土と考えられる。またこの層は、東側および南側に行くにつれて厚く堆積する。黒褐色粘質土の堆積が薄い北側では、2～7層までの間に旧水田層と盛土層の互層が確認できる。

01－2・1～2・3区では柱穴および自然流路が確認され、層の厚さに若干違いが認められるものの、概ね撹乱の下は現在の耕作土で、盛土、流路内堆積土、遺構面となる褐色ないしはにぶい黄褐色の自然堆積層となる。隣接する調査区でも、若干異なる土層堆積を示し、01－2・1では撹乱（1・2層）、現在の耕作土（3層）、盛土（4層）、流路内堆積土（5層）、褐色粘性砂質土の遺構面、01－2・2、2・3でも同じように撹乱（1層）、現在の耕作土（2層）、盛土（3～5層）、流路内堆積土（6層）、にぶい黄褐色粘質土の遺構面となる。この調査区でも、遺構面は東に向かって緩やかに下がるのが確認できる。

01－1区で確認された黒色土の堆積は、隣接する02－1区でも確認できる。02区は調査区のほぼ全面

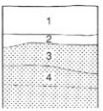


L=86.10m ①



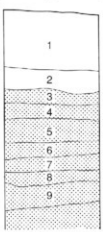
1. 撹　　乱
2. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

L=86.20m ②



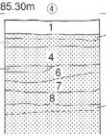
1. 撹　　乱
2. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
3. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

L=86.10m ③



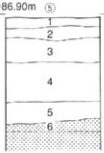
1. 撹　　乱
2. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
4. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土
5. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
6. 暗　褐　色(10YR3/4)砂層
7. 褐　　色(10YR4/4)砂層
8. 褐　　色(10YR4/6)砂層
9. 褐　　色(10YR4/4)砂層

L=85.30m ④



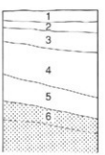
1. 黄　灰　色(2.5Y5/1)砂質土ー撹乱
2. 暗 灰 黄　色(2.5Y5/2)砂質土
3. 黄　褐　色(2.5Y5/4)シルト
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
5. 黄　褐　色(2.5Y5/3)シルト
6. 黄　褐　色(2.5Y5/4)シルト
7. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
8. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
9. オリーブ褐色(2.5Y4/4)細砂

L=86.90m ⑤



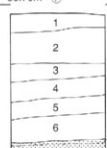
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土ー撹乱
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
3. 灰 黄 褐　色(10YR4/2)シルト
4. 褐　　色(10YR4/4)シルト
5. 暗　褐　色(10YR3/3)シルト
6. 褐　　色(10YR4/6)粘性砂質土

L=87.00m ⑥



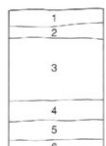
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土ー撹乱
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
3. 灰 黄 褐　色(10YR4/2)シルト
4. 褐　　色(10YR4/4)シルト
5. 暗　褐　色(10YR3/3)シルト
6. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土

L=86.70m ⑦



1. 灰 黄 褐 色(10YR4/2)砂質土ー撹乱
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3. 黒　褐　色(10YR3/2)砂質土
4. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
5. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
6. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
7. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

L=87.00m ⑧

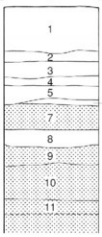


1. 暗　褐　色(10YR3/3)砂質土ー撹乱
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
3. 暗　褐　色(10YR3/4)シルト
4. 暗　褐　色(10YR3/3)シルト
5. 灰 黄 褐　色(10YR4/2)粘質土
6. 黒　褐　色(10YR3/2)粘質土
7. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

0　　1m

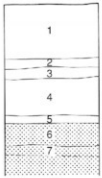
第75図　東州津遺跡 基本土層図(1)

L=86.20m ⑨



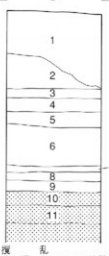
1. 撹　　乱
2. にぶい黄色(10YR4/3)粘性砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
4. 褐　　色(10YR4/6)粘性砂質土
5. 暗　褐　色(10YR3/3)粘性砂質土
6. 黒　褐　色(10YR3/2)粘性砂質土
7. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土―第1遺構面
8. 黄　褐　色(10YR5/6)粘質土
9. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土―第2遺構面
10. 褐　　色(10YR4/6)粘性砂質土
11. 暗　褐　色(10YR3/4)粘質土

L=86.10m ⑩



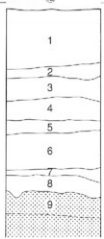
1. 撹　　乱
2. にぶい黄色(10YR5/3)粘性砂質土
3. 灰　黄　褐　色(10YR5/2)粘性砂質土
4. 黒　　褐　色(10YR3/2)粘質土
5. 黒　　褐　色(10YR2/2)粘質土
6. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
7. 黄　　褐　色(10YR5/6)粘質土

L=86.20m ⑪



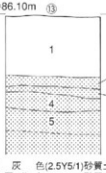
1. 撹　　乱
2. 黄　褐　色(2.5Y5/3)砂質土
3. 黄　褐　色(10YR5/6)砂質土
4. 暗 灰 黄 色(2.5Y5/2)砂質土
5. 暗 灰 黄 色(2.5Y4/2)砂質土
6. 黒　褐　色(10YR3/2)砂質土
7. 灰 黄 褐 色(10YR4/2)粘質土
8. 黒　褐　色(10YR2/2)粘質土
9. 黒　　色(10YR2/1)粘質土
10. 暗 灰 黄 色(2.5Y5/2)砂質土
11. にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土

L=86.00m ⑫



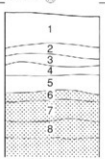
1. 撹　　乱
2. 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘性砂質土
3. 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘性砂質土
4. 暗 灰 黄　色(2.5Y5/2)粘性砂質土
5. 暗 灰 黄　色(2.5Y5/2)粘性砂質土
6. 褐　灰　　色(10YR4/1)粘性砂質土
7. 褐　灰　　色(10YR4/1)粘性砂質土
8. 黒　褐　　色(10YR3/2)粘質土
9. 灰　白　　色(7.5Y8/2)粘質土

L=86.10m ⑬



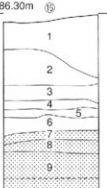
1. 黄　灰　　色(2.5Y5/1)砂質土―撹乱
2. 暗 灰 黄　色(2.5Y5/2)砂質土
3. 黄　褐　　色(2.5Y5/4)シルト
4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
5. 黄　褐　　色(2.5Y5/3)シルト

L=86.10m ⑭



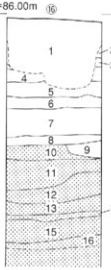
1. 撹　　乱
2. 灰　黄　褐　色(10YR4/2)粘性砂質土
3. 灰　黄　褐　色(10YR5/2)粘性砂質土
4. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土
5. 黒　　褐　色(10YR3/2)粘性砂質土
6. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
7. 褐　　色(10YR4/6)粘質土
8. 褐　　色(10YR4/4)粘質土

L=86.30m ⑮



1. 撹　　乱
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
3. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
4. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
5. 灰 黄 褐　色(10YR5/2)粘性砂質土
6. 黒　褐　色(10YR3/2)粘質土
7. 黄　褐　色(10YR5/6)粘質土
8. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
9. 黄　褐　色(10YR5/6)粘質土

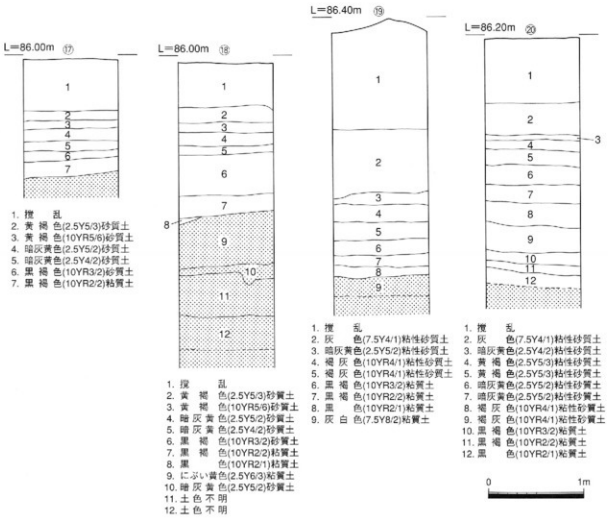
L=86.00m ⑯



1. 撹　　乱
2. 灰　黄　褐　色(10YR4/2)粘性砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
4. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
5. 灰 黄 褐　色(10YR4/2)粘性砂質土
6. 暗　褐　　色(10YR3/3)粘性砂質土
7. 黒　褐　　色(10YR3/2)粘質土
8. 黒　褐　　色(10YR3/1)粘質土
9. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土―SD1003
10. 黄　褐　　色(2.5Y5/3)粘質土
11. 黄　褐　　色(10YR5/6)粘質土
12. 暗 灰 黄　色(2.5Y5/2)粘質土
13. 褐　灰　　色(10YR6/1)粘性砂質土
14. にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土
15. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
16. オリーブ灰色(5YG5/1)粘質土

0　　1m

第76図　東州津遺跡 基本土層図(2)



第77図　東州津遺跡 基本土層図(3)

が自然流路となり、調査区北西隅で自然流路の北肩が部分的に検出された。基本層序は概ね、攪乱、現在の耕作土、盛土ないしは床土、旧耕作土と盛土の互層、黒褐色粘質土、にぶい黄色ないしは灰白色の自然堆積層となる。この黒褐色粘質土は、流路内堆積土と考えられる。

2．遺構と遺物

平成11（1999）年度から平成14（2002）年度にかけて行われた調査で確認した遺構の配置については、第78図に示すとおりである。調査区は段丘の平坦面上に拡がり、部分的に宅地造成に伴う削平を受けるものの全調査区において遺構・遺物を確認した。また00－2区で、部分的に第二遺構面を確認した。

今回の調査で確認された遺構・遺物の所属時期は、縄文時代晩期・弥生時代終末期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代と時代幅が広く、検出遺構数は多いものの、遺物の出土が認められた遺構は少ない。

遺構数は、第一遺構面では溝５条、土坑５基、炭窯１基、柱穴185基、自然流路１条、不明遺構１基を、第二遺構面では土坑２基、柱穴７基を確認した。調査対象地は、出土遺物から第一遺構面は中世を、第二遺構面では縄文時代晩期以降を主体にするのではないかと思われる。

(1) 第一遺構面（第78図）

溝

溝１号（SD1001）（第79・80図）

00－１区　D～F－１～３で確認された溝。溝はさらに調査区の北側および東側に延びるが、東側にある調査区では、続きと考えられる溝の検出はされていない。断面形態はほぼU字形を呈し、調査区内での全長14.98m、最大幅0.46m、最大深度0.44mを測る。溝の深さは東側ほど深くなることから、東流すると推測できる。覆土は土色および土質の違いから、３層に分層できる。１層はにぶい黄褐色砂質土で、２層は暗褐色砂質土、３層はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、土師質土器椀・杯・小皿・鍋、黒色土器椀、須恵質土器貯蔵具片、縄文土器片、焼土塊、サヌカイト製楔形石器、サヌカイト剥片0.49ｇが２層を中心に出土し、図化できたのは土師質土器小皿（１～３）・鍋（４）、サヌカイト製楔形石器（S１・S２）の６点である。図化できた小皿の底部は、２点共に回転ヘラ切りのちにナデを施す。

溝２号（SD1002）（第80～90図・附図１・２）

99－１区・00－１区　A～F－０～６でSD1001に切られた状態で確認された溝。また部分的に、宅地造成に伴う撹乱を受ける。溝は、さらに調査区の北側および東側に延びるものの、東側にある00－２区ではその延長と考えられる溝が検出できなかったことから、続きがあるとするならば調査対象地の南側を走ると考えられる。

溝の断面形態はほぼV字形を呈し、調査区内での全長22.6m、最大幅4.12m、最小幅2.60m、最大深度1.56mを測る。溝の深さは南側ほど深くなることから、南東方向に向かって南流したと推測できる。

また遺物の出土状況は、ベルトA・E・Fの３地点にやや集中する傾向を見せ、特にFベルト付近に多く認められる（附図１・２）。また層位的に見ると、遺物はどの層位からもその出土が認められるが、最下層を中心とする。ほぼ完形の甕や鉢の出土が認められ、また遺物の接合関係をみると、破片が１m範囲内で接合するもの（５・16・19・28など）や、最大で５m程離れた場所で接合した甕（25）、最上層と最下層から出土した破片が接合した高坏（63）もある。

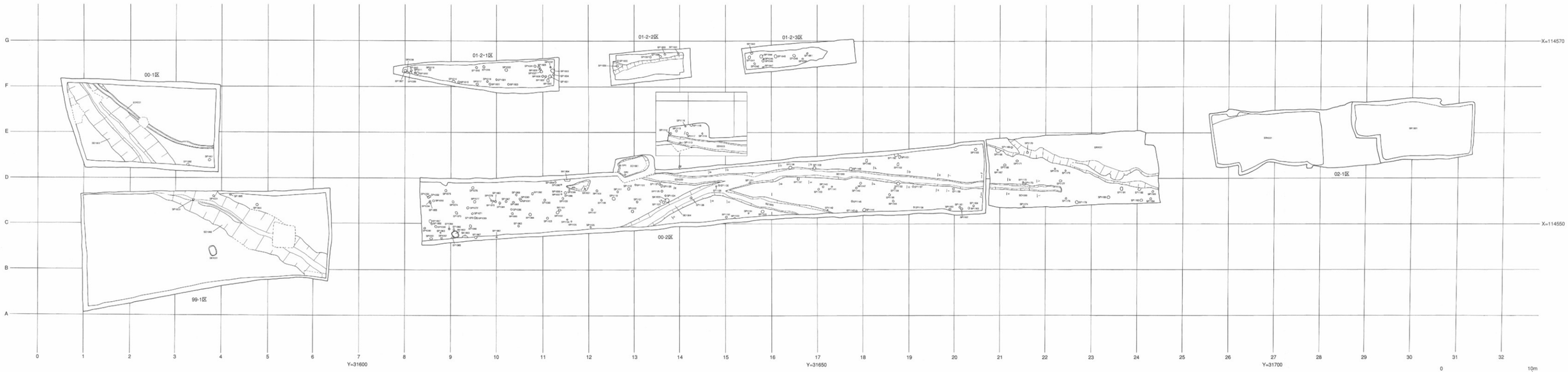
土器の中には、壺（５）のなかに甕（15）が収められた状態で出土したものがある（写真図版58）。15はほぼ完形だが、５は口縁部から頸部が欠損した状態で出土している。また同一個体と考えられる口縁部が体部の隣接した場所で出土しているものの、体部との接点は認められない。

土器の出土が多く認められた最下層は、褐色土ブロックを大量に混入しており、その出土状況から人為的に埋められた可能性も考えられる。

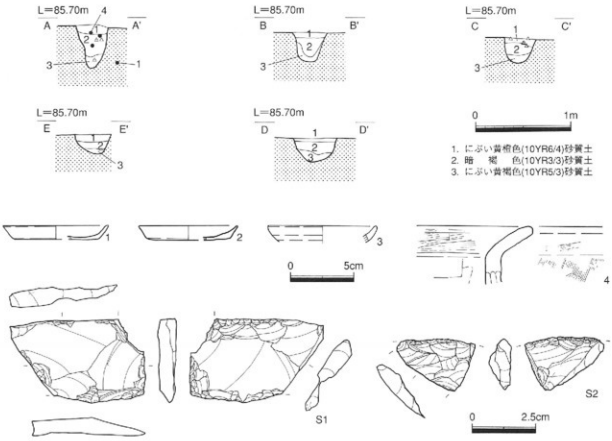
土層堆積（第81図）

覆土の堆積状況は、土層を取った地点によって異なるが、概ね11～19層に分けることができる。99年度の調査では、土色および土質の変化から大きく最上層・上層・中層・下層・最下層の５層に分けて掘り下げを行っている。00年度の調査で設定したベルトA・Bも堆積状況から分類可能なため、第81図のように層位分けを行った。

C～Fベルトは、概ね最上層は褐色、上層はにぶい黄褐色、中層は黒褐色、下層は褐色、最下層はに



第78図　東州津遺跡 遺構配置図（第一面）



第79図　SD1001断面図・出土遺物

ぶい黄褐色を呈する。5層中明瞭に区別が付きやすいのが中層で、A・Bベルトも同様である。中層は黒色あるいは黒褐色の単層ないしは2層からなり、他の層より炭化物を多く含む。また下層中の層のうち、中層に隣接する層は地山ブロックを混入する。

最下層のうち、Cベルト10層、Dベルト17層、E・Fベルト12層の3層は褐色土ブロックを大量に混入するとともに、土器片を多く含む。これらの層以外に土器を多く含むのは、Dベルト16層、Fベルト11層である。また、Dベルト18層は土器片を少量含み、暗褐色粘質土ブロックをやや多く混入する。

土層観察では明確な流水痕跡は認められなかったものの、C～Fベルトの最下層ではブロック上が確認され、また覆土除去後、溝の底部では固く締まった鉄分の沈着層が認められた。

出土遺物（第83～90図）

遺物は、主に最下層中および溝の床面直上を中心に出土した。出土遺物の中には、完形品もある。また石器のうち、図化できなかったサヌカイトが合計427.47g出土し、内訳として、99－1区から26.09g、00－1区から401.38gとなる。出土遺物のうち、図化できたのは弥生土器壺7点・甕26点・底部6点・鉢16点・高坏11点、縄文土器深鉢2点、鉄鏃1点、サヌカイト製石鏃2点・石錐1点・楔形石器8点、打製石庖丁2点、削器4点、石錐1点、石鏃2点、敲石2点、サヌカイト剥片2点、石核3点、台石1点、磨石1点の計98点である。出土した土器の中で、10・15・17・18・21・24・44・45・51・53～

57・59の15点はほぼ完形での出土である。

壺（5～11）は、広口壺（5～8）・二重口縁壺（9）・直口壺（10・11）が出土し、底部（38・40・41・41）は平底である。10も平底だが、やや丸みを帯びる。10の最大体部径付近に、焼成時に伴う器表面のはぜた痕跡が認められる。壺は、5・6のみタタキ成形である。

甕（12～37）は遺存状態が悪く調整不明瞭なものもあるが、タタキ成形が主体である。また底部は平底が主体で、完全な丸底は認められない。12～14はタタキ成形だが、12は内面の調整に、13・14は口縁端部に古い様相を残す。15～23はタタキ成形の甕で、15～19はタタキの後、体下半部を中心にハケメを施す一群で、内面はハケメ・ユビナデ・板ナデ調整である。また15・19・20は、最大体部径を中心に炭化物の付着が多く認められる。19は外面の仕上げは丁寧だが、内面は粗雑である。20～23はタタキ成形の後、ハケメを施さない一群である。24～34はタタキ成形ではない一群で、口縁部が外上方へ大きく開く。外面の調整はハケメが主体で、ミガキを施すものもある(27)。31は胎土に金雲母を含むことから、讃岐からの搬入品の可能性がある。38の器表面には、はぜた痕跡が認められる。

鉢（44～59）のうち、有孔鉢は3点である（57～59）。タタキ成形が主体で、外面はタタキの後ハケメ・板ナデを施す（44～48・57・58）。また底部から体部下半にかけて、縦方向あるいは横方向のケズリを施すものもある(49・50・59)。また48・49・51の体部には、縦敲痕が認められる。46の胎土には、チャートが含まれる。また鉢と一緒に掲載しているが、55・56は皿の可能性がある。

高坏（60～70）は出土量が少なく、坏部・脚部揃っての出土は認められなかった。また63は最下層中から出土しているものの、最上層から出土した破片と接合した。

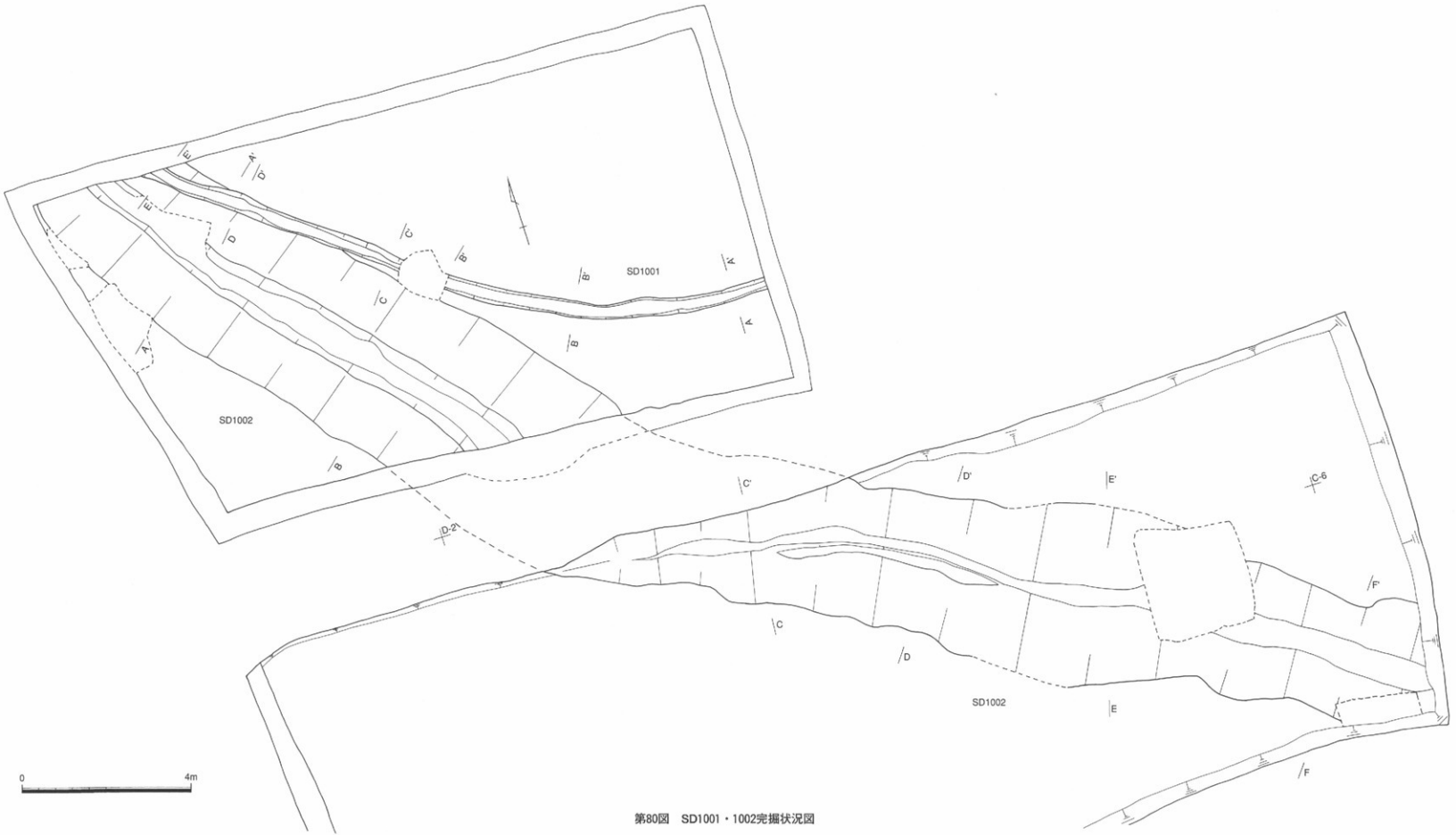
71・72はともに縄文時代の深鉢で、71はD字刻目が施された貼り付け突帯を持つ晩期の深鉢である。72は遺存状態が悪いものの、無文深鉢と思われる。73は釜の部分が欠損するが、古墳時代後期の鉄鎌である。

図化できた石器はサヌカイト製石鏃（S3・S4）・石錐（S5）・楔形石器（S6～S13）、打製石庖丁（S14・S15）、削器（S16～S19）、石錘（S20）、石鏃（S21・S22）、敲石（S23・S24）、サヌカイト剥片（S25・S26）、石核（S27～S29）、台石（S30）、磨石（S31）である。石鏃は共に一部欠損するものの、S3は平基三角、S4は凹基式である。楔形石器のうち、S6～9は打面が四方向、S10～13は二方向である。石庖丁は2点共に結晶片岩製で横長剥片を用い、S14は凸刃で単刃、S15は平刃で複刃を持つ。削器はS16のみ結晶片岩製で、他の3点はサヌカイト製である。S16～18は横長剥片、S19は縦長剥片を使用し、S16～18は平刃を、S19は複刃を持つ。S20は打欠石錘である。石鏃2点ともに結晶片岩製で、S21では表裏面に磨滅痕が認められる。敲石2点は砂岩製で、S23は下側縁部に、S24は表裏面の二ヶ所に敲打痕が認められる。石核はS27・28が結晶片岩、S29はサヌカイトである。S30は砂岩製台石、S31は砂岩製磨石で、表裏面と右面の3面に擦痕が認められる。

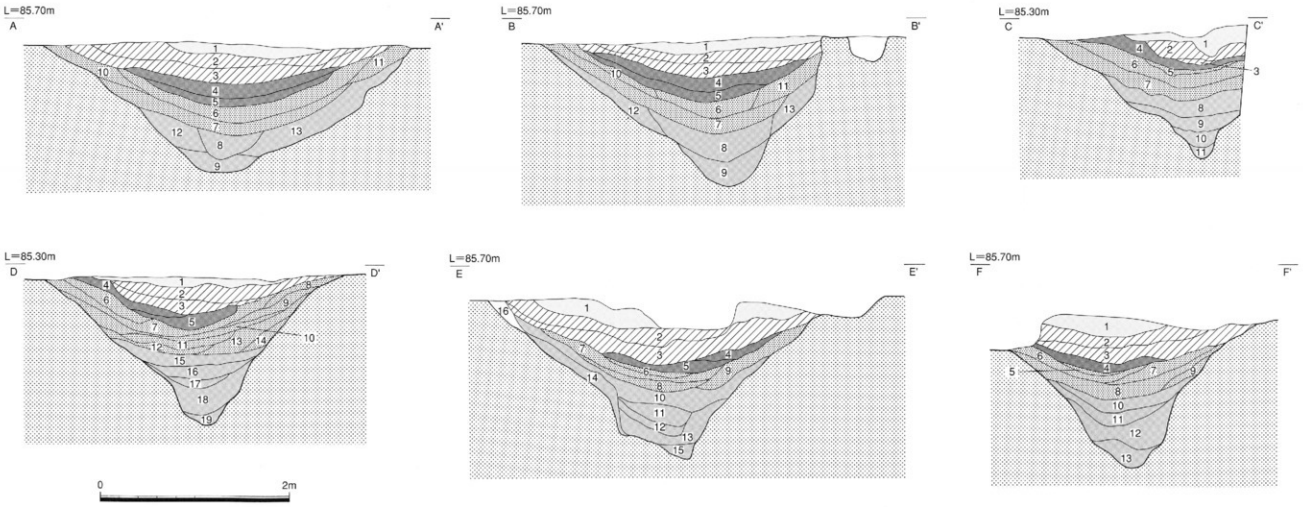
時期

最下層から完形土器の出土が認められること、およびタタキ成形の器種が主体であることから、この溝は弥生時代後期後葉から終末期前半には存在したと考えられる。出土遺物のうち土器2個体が入れ子状態で出土し、土層堆積状況から人為的に埋められた可能性も考えられる。また、後出する遺物の出土および土器の接合状況から、埋没途中に溝の再掘削が行われた可能性が考えられる。

調査時では溝の規模および断面形態から、この溝を環濠として捉えていた。しかし出土遺物から、主



第80図　SD1001・1002完掘状況図



A-A' B-B'

1. にぶい黄橙色(10YR6/4)粘性砂質土
2. 黄　褐　色(10YR5/6)粘性砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
4. 黒　褐　色(10YR3/1)粘性砂質土
5. 黒　　色(10YR2/1)粘性砂質土
6. 灰 黄 褐 色(10YR4/2)粘性砂質土
7. 暗　褐　色(10YR3/3)粘性砂質土
8. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
9. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土
10. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
11. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
12. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
13. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土

C-C'

1. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
3. 黄　褐　色(2.5Y5/3)粘質土
4. 黒　褐　色(10YR2/2)粘質土
5. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
6. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
7. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
8. 灰 黄 褐 色(10YR4/2)粘質土
9. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
10. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
11. にぶい黄 色(2.5Y6/4)粘質土

D-D'

1. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
4. 黒　褐　色(10YR3/2)砂質土
5. 黒　褐　色(10YR2/2)粘質土
6. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
7. 褐　　色(10YR4/4)粘性粘質土
8. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
9. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
10. 暗　褐　色(10YR3/4)粘質土
11. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
12. 暗　褐　色(10YR3/4)粘質土
13. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
14. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
15. 灰 黄 褐 色(10YR4/2)粘質土
16. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
17. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
18. 黄　褐　色(2.5Y5/3)粘質土
19. にぶい黄 色(2.5Y6/4)粘質土

E-E'

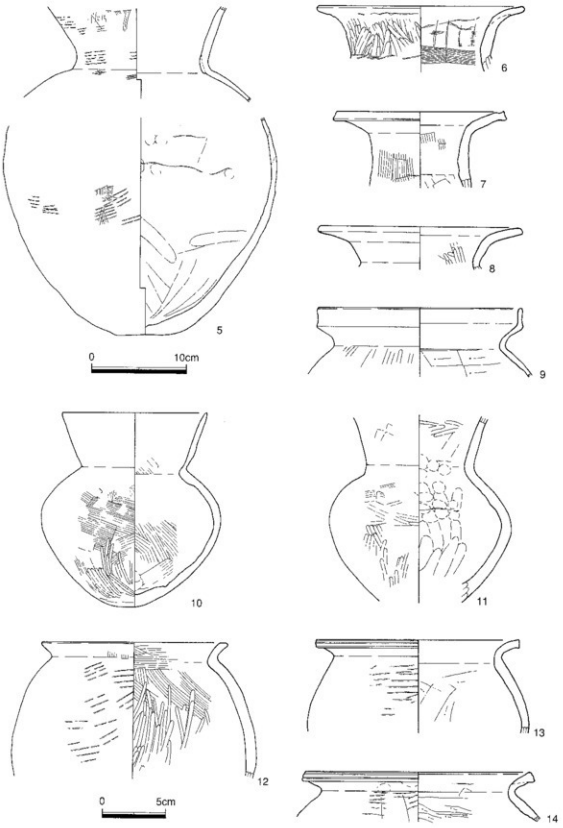
1. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
4. 黒　褐　色(10YR3/2)砂質土
5. 黒　褐　色(10YR2/2)粘質土
6. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
7. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
8. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
9. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
10. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
11. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
12. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
13. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
14. にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
15. にぶい黄 色(2.5Y6/4)粘質土
16. 地　　山

F-F'

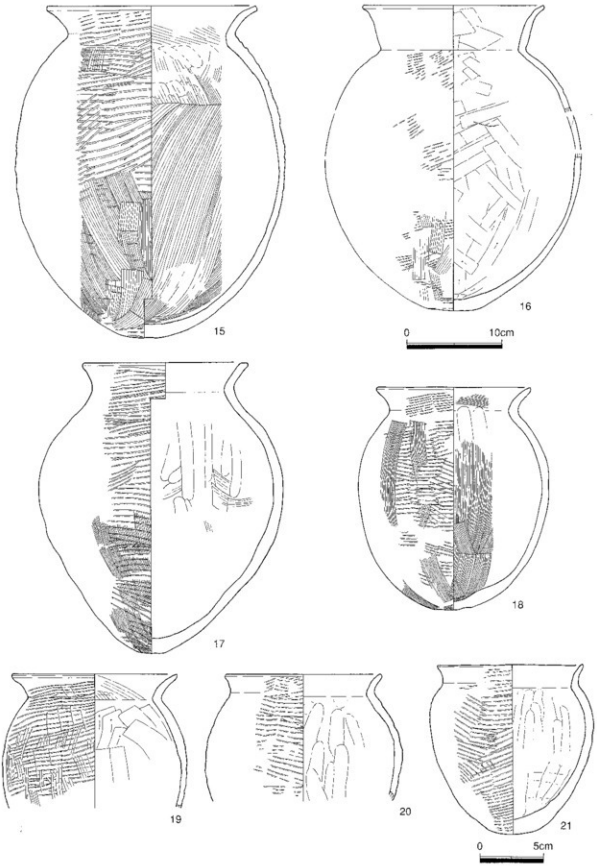
1. 褐　　色(10YR4/4)砂質土
2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
4. 黒　褐　色(10YR2/2)粘質土
5. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
6. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
7. 褐　　色(10YR4/4)粘性砂質土
8. 暗　褐　色(10YR3/3)粘質土
9. 褐　　色(10YR4/4)粘質土
10. にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
11. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
12. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
13. にぶい黄 色(2.5Y6/4)粘質土

最上層
上層
中層
下層
最下層

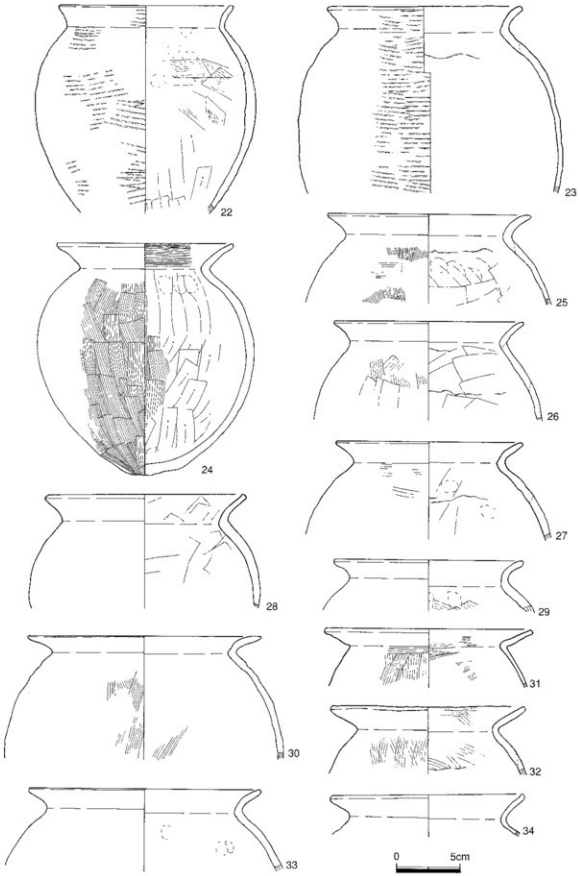
第81図　SD1002土層断面図



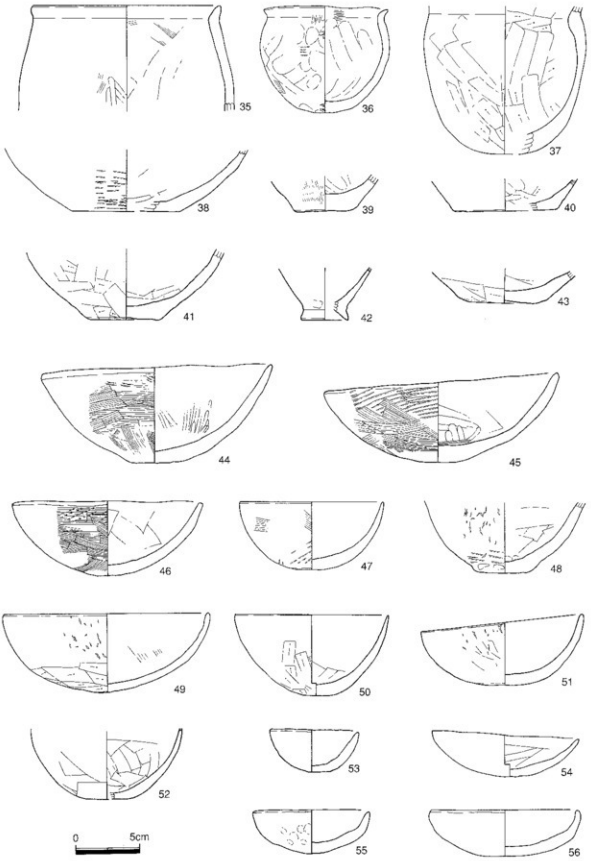
第82図　SD1002出土遺物（土器）(1)



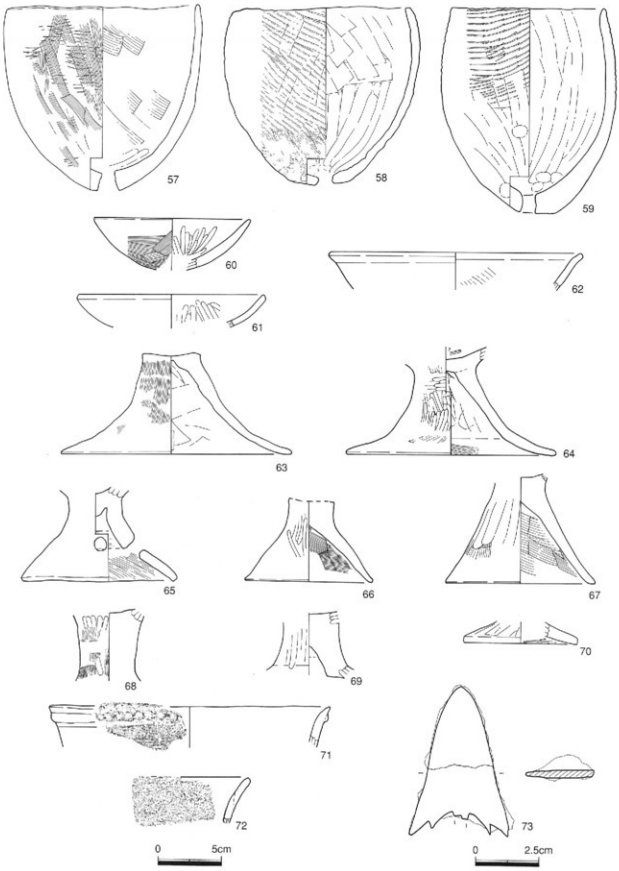
第83図　SD1002出土遺物（土器）(2)



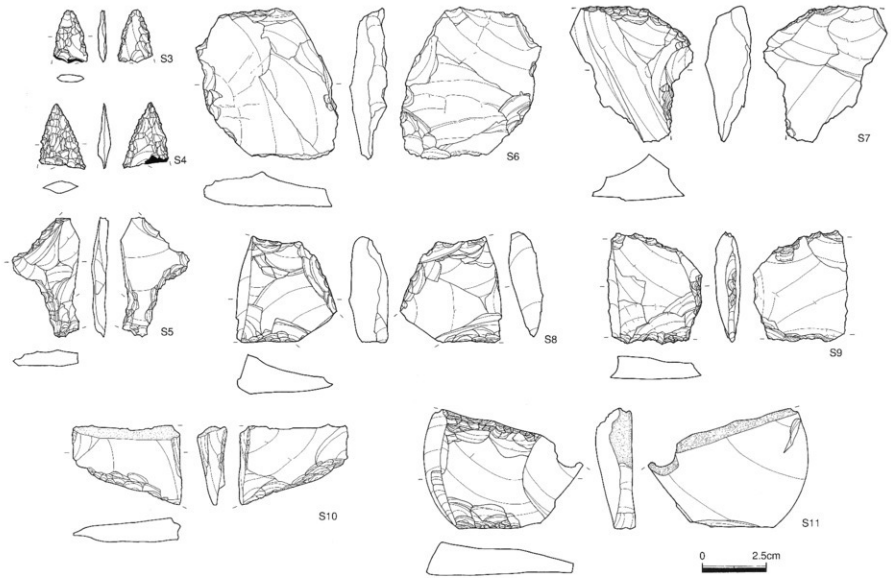
第84図　SD1002出土遺物（土器）(3)



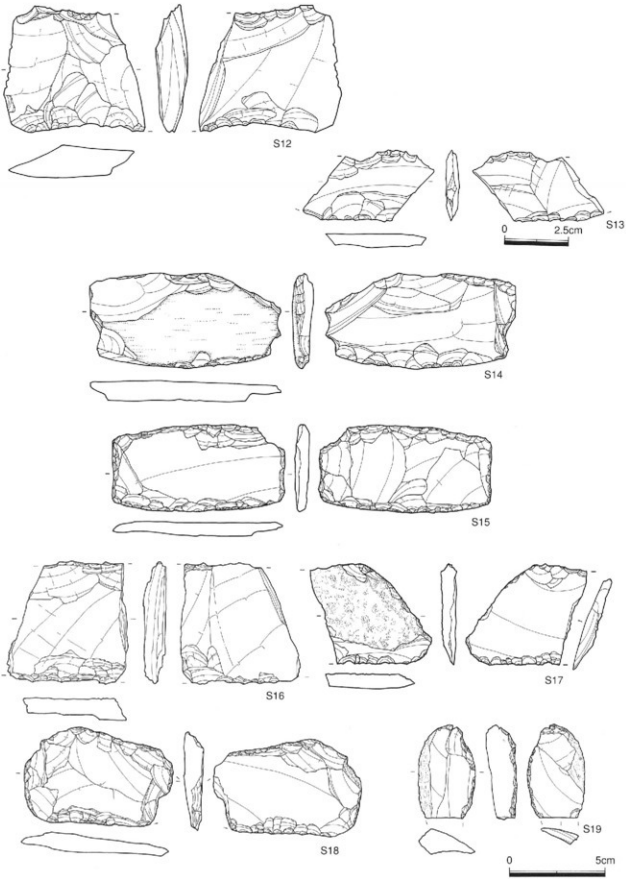
第85図　SD1002出土遺物（土器）(4)



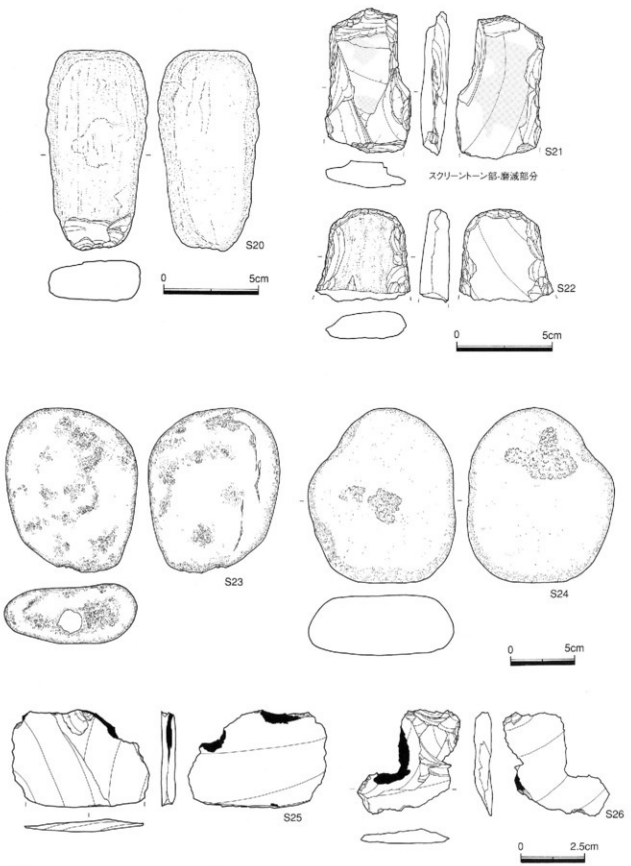
第86図　SD1002出土遺物（土器）(5)



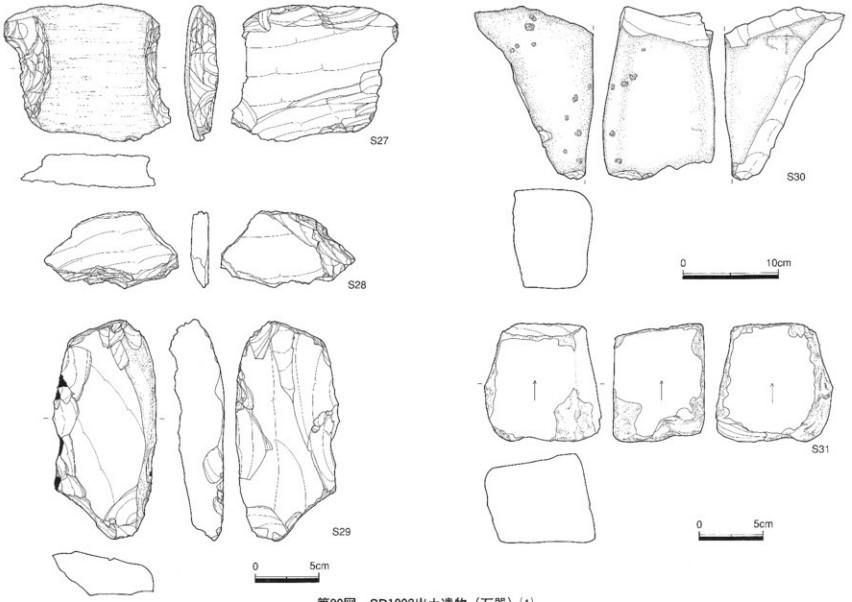
第87図　SD1002出土遺物（石器）(1)



第88図　SD1002出土遺物（石器）(2)



第89図　SD1002出土遺物（石器）(3)



第90図　SD1002出土遺物（石器）(4)

体となる時期が弥生時代後期後葉から終末期前半であること、また調査対象地の狭小さから溝の配置が不明であり、どのように巡っているのか判断しがたい。今回は溝として報告し、周辺の調査が進み、遺跡の拡がりが確認されてから判断したい。

溝3号（SD1003）（第91・92図）

00－2区・01－1区　B～D－12～22でSO1001・柱穴8基に切られた状態で確認された溝。溝の東端は01－1区で終了するが、西側は調査区外に延びる。しかし00－2区の西側にある99－1区・00－1区では、この溝の続きは検出されていない。調査時では、調査区南側から東側へ向かう溝として検出していたが、整理時の検討により、溝の深度から西側から東側へ向かう溝として報告することにした。後述するSD1004・1005との切り合い関係は不明である。断面形態は逆台形ないしは舟底形を呈し、調査区内での全長48.84m、最大幅1.50m、最大深度0.26mを測る。溝の深さは東側ほど深くなることから、東流すると推測できる。覆土は土層を取る地点で異なるものの、概ね暗褐色を呈し、2層ないしは3層に分層できる。

遺物は、須恵質土器椀、須恵器甕片、弥生土器甕、縄文土器片、サヌカイト製楔形石器・剥片、緑色片岩製石斧、砂岩製敲石・台石、焼土塊が出土し、図化できたのは楔形石器（S32）、石斧（S33）、敲石（S34）、台石（S35）の4点である。遺物の出土状況から、これらの石器は覆土の上層から出土している。またS35は、ベルトBC間の溝の北肩に接して出土した。

溝4号（SD1004）（第93図）

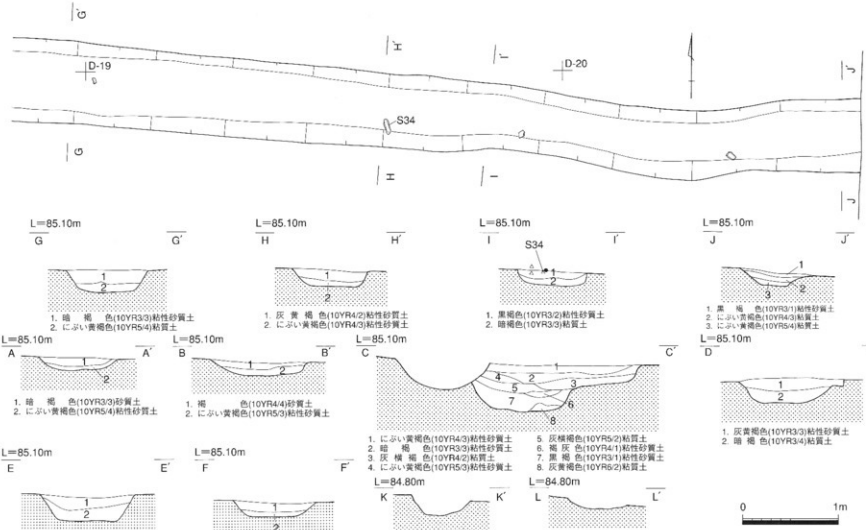
00－2区　B～D－12～20で柱穴4基に切られた状態で確認された溝。南側は調査区外に延び、SD1003・SD1005との切り合い関係は不明である。断面形態はやや不整な逆台形を呈し、調査区内での全長38.91m、最大幅1.46m、最大深度0.56mを測る。溝の深さは南側が深いことから、南流すると推測できる。覆土は土層を取った地点で堆積が微妙に異なり、6層ないしは7層に分層できる。

遺物は、須恵質土器椀、須恵器甕片、弥生土器甕、縄文土器片、サヌカイト剥片、焼土塊が出土したものの、図化できるものはなかった。

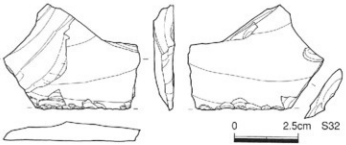
溝5号（SD1005）（第93図）

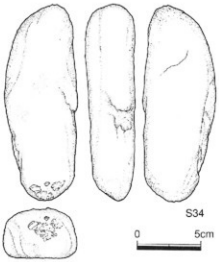
00－2区　C－14～17で確認された溝。南側は調査区外に延び、SD1003・1004との切り合い関係は、不明である。断面形態は逆台形を呈し、調査区内での全長10.5m、最大幅1.26m、最大深度0.26mを測る。覆土は3層に分層でき、1層はにぶい黄褐色粘性砂質土、2層は褐色砂質土、3層は灰黄褐色砂質土となる。

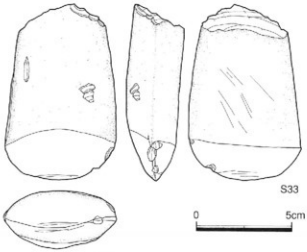
遺物は、サヌカイト製楔形石器（S36）のみの出土である。

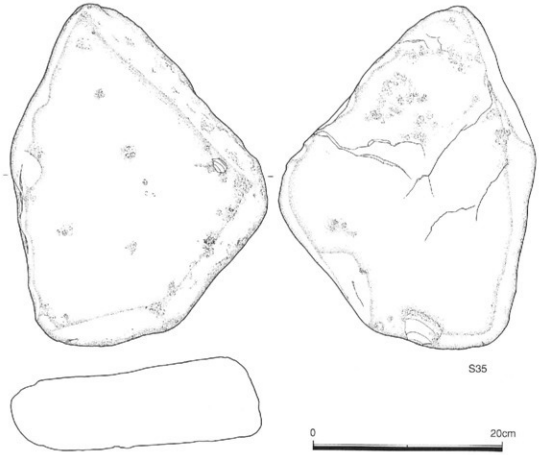


第91図　SD1003遺構図

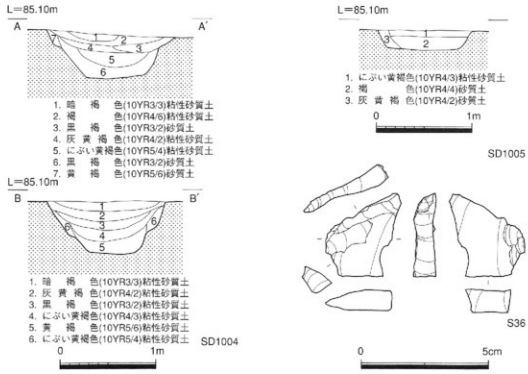








第92図　SD1003出土遺物



第93図　SD1004・1005断面図・出土遺物

土坑

土坑１号（SK1001）（第94図）

99－１区　B－３で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.12m、短軸0.72m、最大深度0.24mを測る。覆土は黄褐色砂質土で、灰黄色ブロック土を多く混入する。含有物の違いから２層に分層でき、下層は上層と比較して層中に含まれる炭化物の割合が少ない。また上層から、須恵質土器椀（75）が出土した。

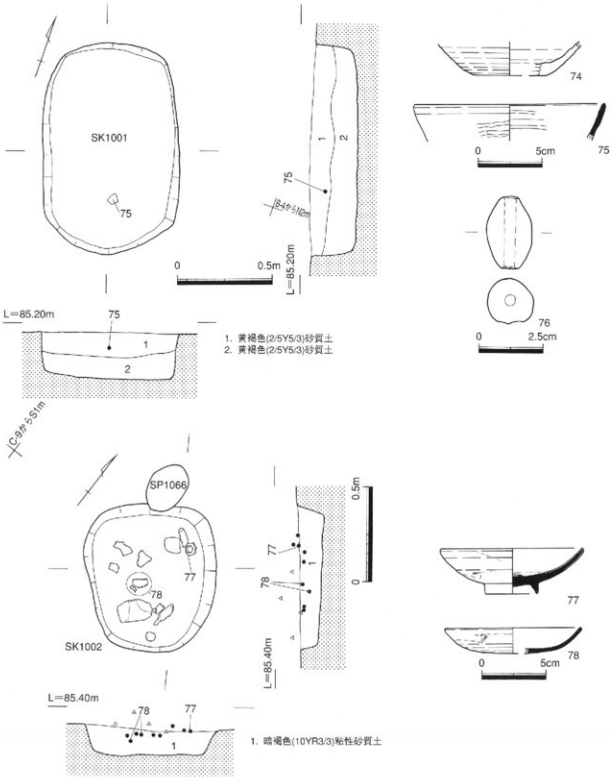
遺物は土師質土器杯・煮沸具片、黒色土器椀、須恵質土器椀、土錘、焼土塊が出土し、そのうち図化できたのは、土師質土器杯（74）・須恵質土器椀（75）・土錘（76）である。

遺構の形態および出土遺物から、12～13世紀の土壙墓の可能性が考えられる。

土坑２号（SK1002）（第94図）

00－２区　B－９でSP1066に切られた状態で確認された土坑。平面形態・底面形態ともに不整な長方形、断面形態は逆台形を呈し、長軸0.78m、短軸0.69m、最大深度0.15mを測る。覆土は暗褐色粘性砂質土１層で、炭化物・焼土を多く含む。

遺物は肥前系磁器碗・蛇ノ目釉剥ぎの陶器皿・灯明皿、土師質焙烙片、土師質土器羽釜、須恵器皿が出土し、そのうち図化できたのは、磁器碗（77）・陶器灯明皿（48）の２点である。灯明皿は備前産で、外面口縁部と内面に施釉する。これらの遺物は、上層に多く認められる。中世遺物が出土しているものの、遺構の所属時期は江戸時代と思われる。



第94図　SK1001・1002遺構図・出土遺物

窯

窯1号（SO1001）（第95図）

00－2区　D－12・13で側溝に切られた状態で確認された窯。西傾に突出部を持ち、平面形態・底面形態ともにやや不整な長方形、断面形態は舟底形を呈する。長軸3.54m、短軸1.70m、最大深度0.22mを測る。覆土は4層に分層されるが、大きく2層に分けることができる。上層（1～3層）は黒褐色を呈し、炭化物を多く含む。また、1・2層では焼土も認められる。下層（4層）は、焼土を含む炭化物層である。

覆土除去後、突出部付近の床面上で小穴2基を検出した。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径0.15m前後、最大深度0.10m前後を測る。遺物の出土は、両柱穴ともに認められなかった。

遺物は土師質土器片・煮沸具片、炭化物が出土したものの、小片のため図化できるものはなかった。この窯は西側に煙道部を持つ炭窯と考えられ、詳細な時期は確定できないものの、出土遺物と遺構の切り合い関係から中世と考えられる。

柱穴

柱穴3号（SP1003）（第96図）

99－1区　C－3で確認された柱穴。平面形態・底面形態ともに円形、断面形態はやや不整な逆台形を呈し、直径0.26m、最大深度0.23mを測る。覆土は3層に分層できるものの、大きく2層に分けることができる。上層（1・2層）は暗灰黄色を呈し、2層は粘性が強い。下層（3層）は黒褐色粘質土で、礫石（S37）を含む。

遺物はサヌカイト剥片、砂岩製礫石が出土し、礫石（S37）のみ図化できた。S37は、表面と下側面の計2ヶ所に敲打痕が認められる。

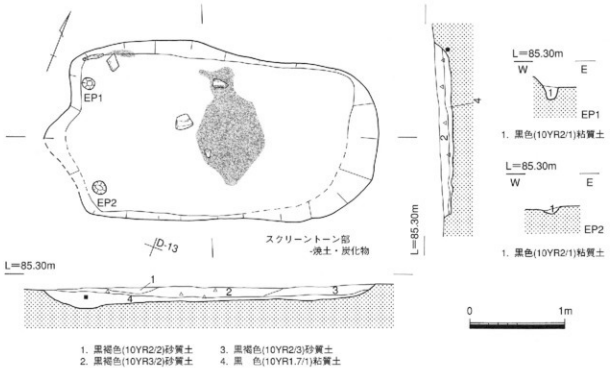
自然流路

自然流路1号（SR1001）（第97～104図）

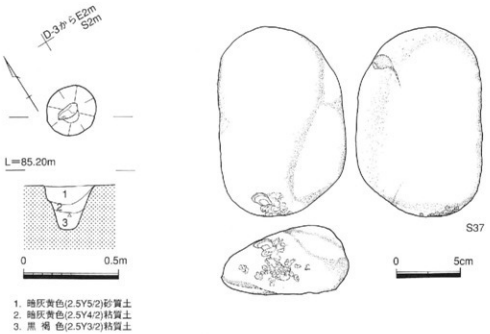
01－1区・02－1区で確認された自然流路。流路幅は調査範囲内では確認できず、その一部が今回の調査で確認されたにすぎない。また先述した西州津遺跡でも自然流路が検出され、同一流路とは確認できないものの遺跡が立地する河岸段丘上には、複数の流路が存在した可能性が考えられる。

流路の断面形態は緩やかな舟底形と思われ、最大幅11.6m、最大深度0.58mを測る。覆土は4層に分層でき、1層は褐灰色粘性砂質土、2層は黒褐色粘質土、3層は黒褐色粘質土、4層は黒色粘質土である。1層はしまりが強いが、2～4層はしまりが弱い。02－1区では、上中下の3層に区分して遺物を取り上げている。上層は1層、中層は2・3層、下層は4層が該当する。01－1区で確認されたのは流路の南肩にあたり、02－1区では流路の北肩の一部が確認できた。流路の肩あたりでは、直径5～50cm大の礫が多く認められる。

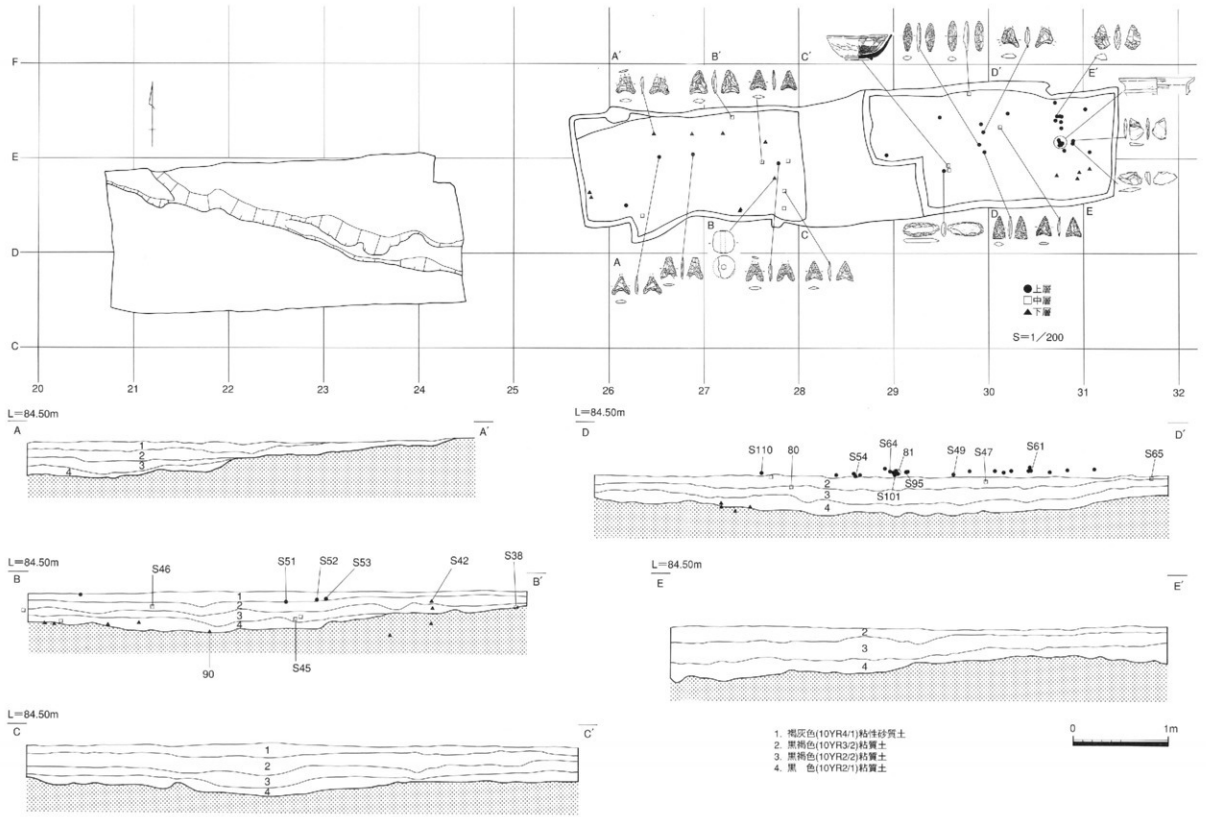
01－1区では、遺物は流路の肩近くから出土した（第98図）。また02－1区では、土器や石器と一緒に木片の出土が認められ、上層では土器・石器の出土量が多いのに対し、下層では土器・石器より木片の出土量が多くなる。層位別に遺物の取り上げを行ったが、時期の明瞭な区分は認められなかった。



第95図　SO1001遺構図

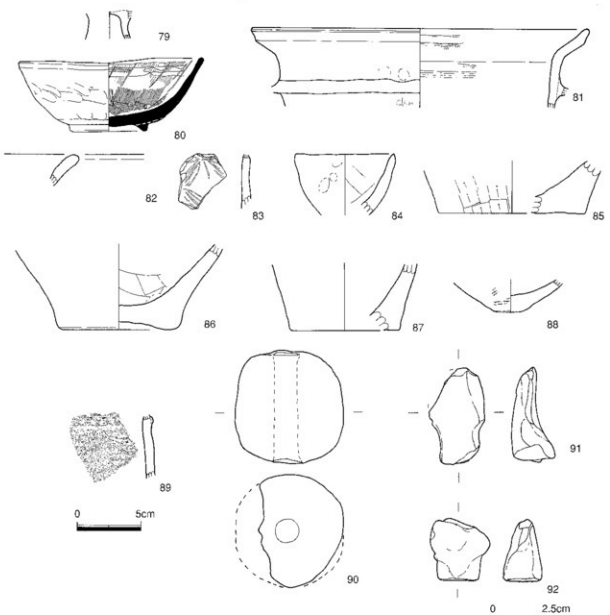


第96図　SP1003遺構図・出土遺物



第97図　SR1001遺構図

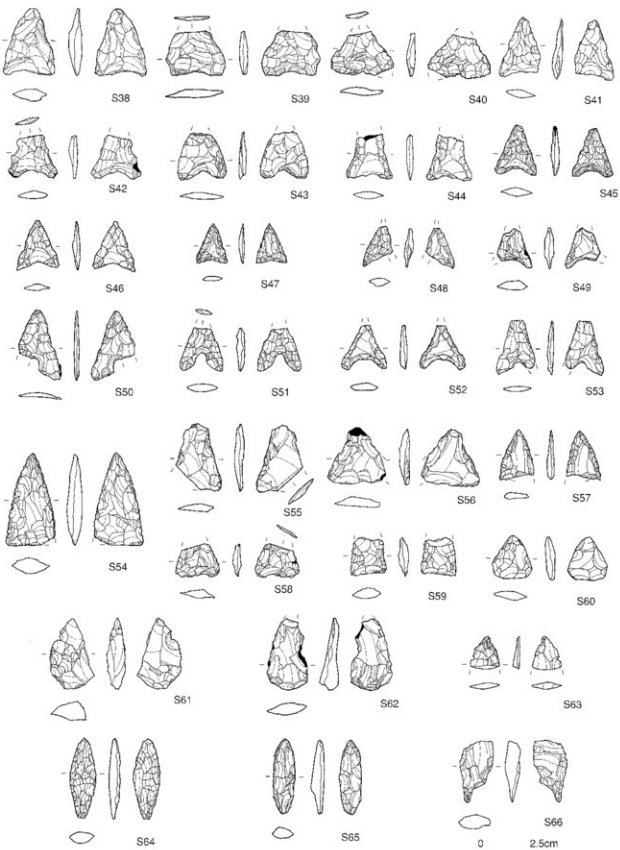
第98図　SR1001遺物出土状況図



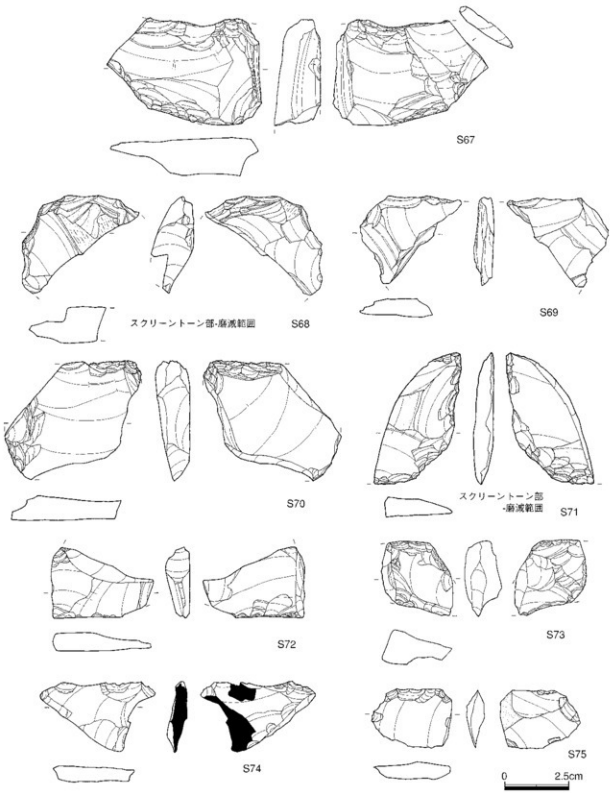
第99図　SR1001出土遺物（土器）

出土遺物

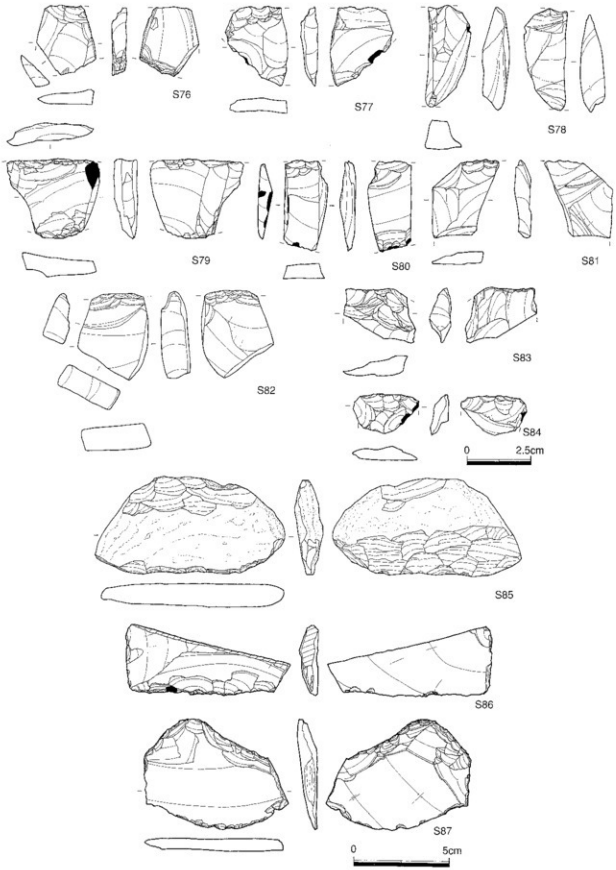
遺物は土師質土器椀・鍋、須恵質土器椀、須恵器、弥生土器壺・甕・鉢・体部片、縄文土器（晩期突帯文）、土錘・木明土製品、サヌカイト製石鏃・石錐・楔形石器・削器・剥片、結晶片岩製削器・石鏃・石斧・敲石、頁岩製砥石、砂岩製敲石が出土した。出土した弥生土器のなかには、木の葉文を持つ体部片や口縁部逆Ｌ字を持つ甕、タタキを施す丸底があり時期幅がある。またSR1001から、図化できなかったサヌカイトが01－１区では57.02ｇ、02－１区では上層で119.32ｇ、中層で103.29ｇ、下層で142.29ｇ、総計421.92ｇ出土した。また出土量の多かった02－１区の中でも、調査区西側での出土が特に多い。



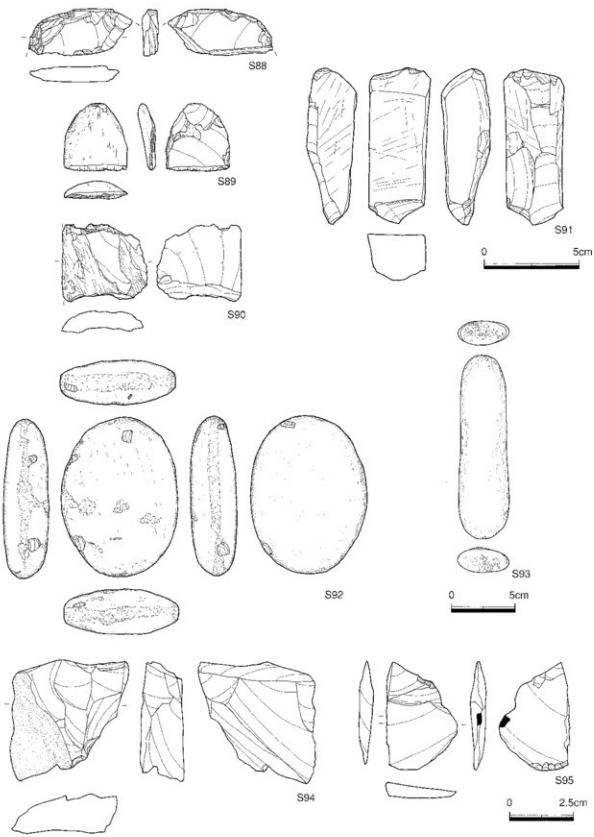
第100図　SR1001出土遺物（石器）(1)



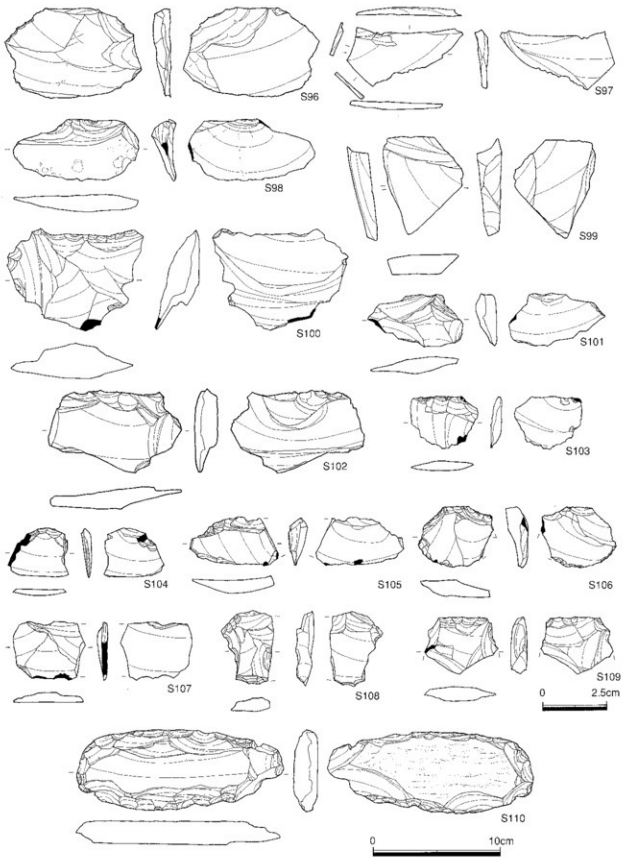
第101図　SR1001出土遺物（石器）(2)



第102図　SR1001出土遺物（石器）(3)



第103図　SR1001出土遺物（石器）(4)



第104図　SR1001出土遺物（石器）(5)

出土遺物のうち図化できたのは、須恵質土器椀（80）、土師質土器鍋（81）、弥生土器壺（82）・体部片（83）・鉢（84）・底部（85～88）、縄文土器深鉢片（89）、土錘（90）、不明土製品（91・92）、サヌカイト製石鏃（S38～S63）・石錐（S64～S66）・楔形石器（S67～S84）、削器（S85～S87）、結晶片岩製石鋤（S88）、石斧（S89・S90）、頁岩製砥石（S91）、敲石（S92・S93）、サヌカイト剥片（S94～S109）、結晶片岩製石核（S110）の計87点である。

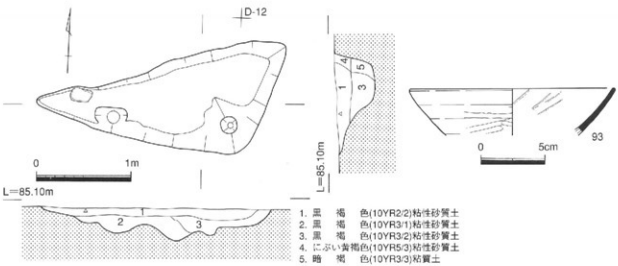
80は畳付けに板状圧痕が認められ、また内面の調整はナデに近いミガキのあとハケメを施す。遺存部の1/3が軟質焼成で、須恵質というより瓦質に近い感じである。下層を中心に弥生土器の出土が認められるが、前期の木の葉文を持つ体部片とタタキを施した鉢が同じ下層から出土している。91・92は不明土製品としたが、その形態から把手の可能性もある。

石鏃（S38～S63）のうち、S38～S53は凹基式、S54～S60は平基三角、S61・S62は凸基式、S63は形式不明である。S61は石材に頁岩を使用するが、他の25点はサヌカイトを用いる。石錐は、S64・S65の2点が完形である。楔形石器のうち、S68・S71には磨滅部分が認められる。打面構成はS67～S71は四方向、S72～S84は二方向と思われる。削器は3点図化でき、S85は結晶片岩の礫を用い、凸刃・単刃を持つ。S86・S87はサヌカイトを用い、S86は平刃・単刃を、S87は凸刃・単刃をもつ。石斧のうちS89は、砂質片岩を用いる。S90には、擦痕が認められる。敲石のうちS92は砂岩を用い、全面に敲打痕、また表面に凹痕が認められる。S93は結晶片岩を用い、上下端面に敲打痕が認められる。

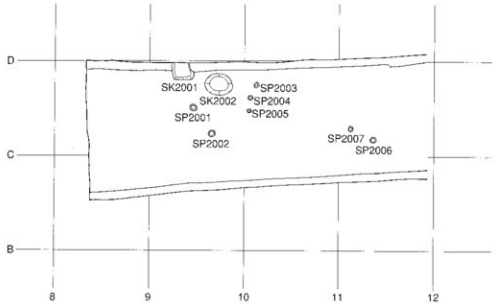
不明遺構

不明遺構1号（SX1001）（第105図）

00－2区　C－11・12で確認された不明遺構。平面形態・底面形態は三角形状、断面形態は不整形を呈し、長軸2.70m、最大幅1.12m、最大深度0.40mを測る。覆土は5層に分層できるものの、概ね黒褐色を呈する。1～3層は黒褐色粘性砂質土で、炭化物の含有量が比較的多いのは1層である。4層はにぶい黄褐色粘性砂質土、5層は暗褐色粘質土で炭化物を含む。覆土除去後、床面上に柱穴2基を確認し



第105図　SX1001遺構図・出土遺物



第106図　東州津遺跡 遺構配置図（第二面）（1/200）

たが、SX1001が柱穴2基を切った可能性が高い。

遺物は土師質土器杯、須恵質土器椀、サヌカイト剥片1.9gが出土し、そのうち図化できたのは須恵質土器椀（93）のみである。出土遺物から、遺構の所属時期は12～13世紀と考えられる。

(2)　第二遺構面（第106図）

第二遺構面の検出は、2000年度の調査で確認された。しかし部分的なものであり、00－2区の西側約20mの範囲に拡がるのみである。第二遺構面は⑩の9層（第76図）が該当し、にぶい黄褐色を呈する。

検出遺構総数は少なく、土坑2基・柱穴6基のみである。

土坑

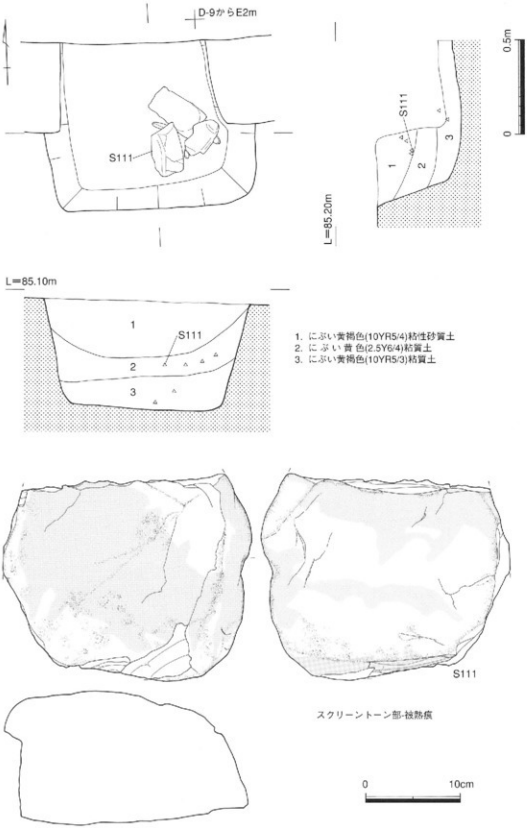
土坑1号（SK2001）（第107図）

00－2区　C－9で調査区北側溝に切られた状態で確認された土坑。遺構は、調査区外にさらに延びる。平面形態・底面形態ともに方形ないしは長方形、断面形態は逆台形を呈し、最大長0.87m、短軸1.11m、最大深度0.57mを測る。覆土は概ねにぶい黄褐色を呈し、3層に分層できる。1層はにぶい黄褐色粘性砂質土、2層はにぶい黄色粘質土で炭化物を含む。3層はにぶい黄褐色粘質土で、多量の炭化物が認められる。また直径10～20cm大の砂岩礫が、床面直上と1・2層にまたがって出土している。

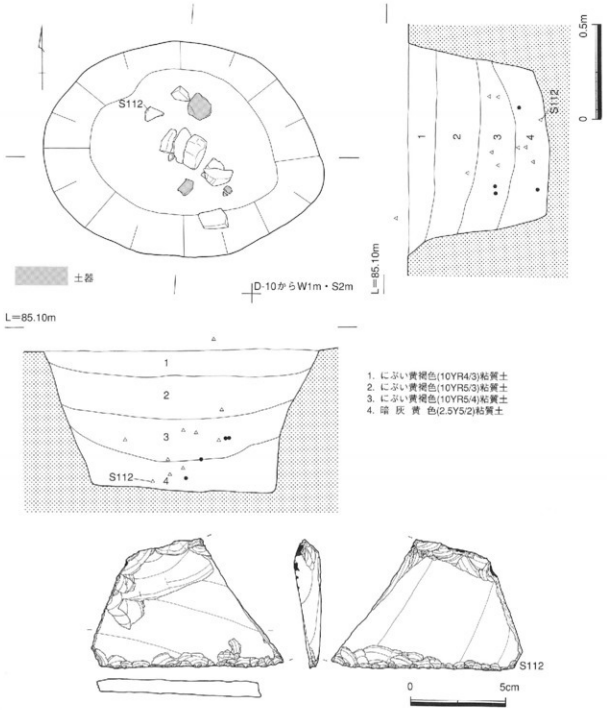
砂岩礫が6点ほど出土し、そのうちの1点が砂岩製台石（S111）である。S111は1・2層にまたがって出土し、表裏面に被熱痕が認められる。

土坑2号（SK2002）（第108図）

00－2区　C－9で確認された土坑。平面形態・底面形態ともにやや不整な楕円形、断面形態は逆台形を呈し、長軸1.14m、短軸1.13m、最大深度0.75mを測る。覆土は4層に分層できるものの、大きく



第107図　SK2001遺構図・出土遺物



第108図　SK2002遺構図・出土遺物

2層に分けることができる。上層（1～3層）はにぶい黄褐色を呈し、炭化物を含む。また3層では直径10～20cm大の砂岩礫を含む。下層（4層）は暗灰黄色粘質土で、3層と同じく直径10～20cm大の砂岩礫を含む。

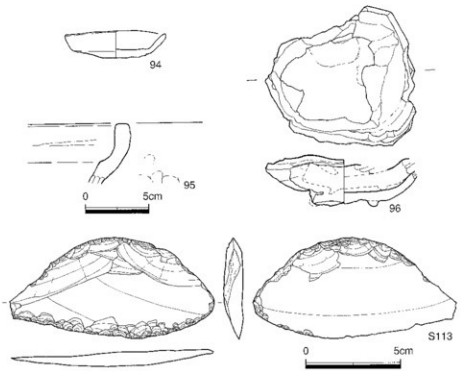
遺物は3・4層を中心にサヌカイト製石鏃丁、砂岩製台石・凹石が出土し、図化できたのは右側縁部が欠損した打製石鏃丁（S112）のみである。S112は横長剥片を用い、平刃・単刃をもつ。また、年報Vol.12では、縄文土器深鉢体部片の出土が報告されているが、遺物の行方が不明なために判断できない。記載によれば、内外面共に条痕のあと丁寧なナデ調整を行い、文様を施していないことから無文深鉢と思われる。器表面には炭化物の付着が認められ、縄文時代後期あるいは晩期の可能性があるとしている。

(3) 包含層（第109～128図）

包含層出土遺物のうち、土器238点、土製品4点、石器55点、鉄器7点の計304点を図化した。00－2区および01－1区では、焼き損じの須恵質土器椀が多く出土したことから、調査区ごとに遺物を掲載することにした。99－1区ではサヌカイト片が6.81g出土しているが、図化できる遺物の出土が認められないないため掲載していない。

00－1区（第109図）

図化できた遺物は少なく、土師質土器小皿（94）・鍋（95）、須恵質土器椀（96）の3点で、サヌカイト製削器（S113）は南側溝からの出土である。



第109図　00－1区包含層・側溝出土遺物

小皿の底部は回転ヘラ切りのあと粗くなでて仕上げ、また内面には炭化物が多量に付着する。須恵質土器椀は焼き損じ品で、3枚の椀が溶着した状態で出土した。器形は大きくゆがむ。S113は完形で、凸刃・単刃をもつ。

00－2区（第110～117図）

今回の報告の中で面積が一番広いため、包含層からの出土量は他の調査区と比較して多い。図化できた遺物のうち土器は、土師質土器椀（97・98）・杯（99～110）・皿（111～113）・小皿（114～124）・柱状高台（125・126）・鍋（127・128）・羽釜脚部（129）、黒色土器椀（130～136）・杯（137）・小椀（138）、瓦器椀（140～145）・小皿（139・146）、羽口（147）、須恵質土器椀（148～174）・杯（175～181）・皿（182）・小皿（183～185）・甕（186～188）、丸質こね鉢（189）、青磁碗（190）、白磁碗（191～193）・鉢（194）、肥前系磁器小皿（195・196）・陶胎染付碗（197）、土師質焙烙（198）、鉄製鍬先（199）である。また石器は、石鏃（S114～S116）・楔形石器（S117～S120）・石庖丁（S121）・削器（S122）・石棒（S125～S127）、敲石（S128～S130）、剥片（S131～S151）である。

97・98は土師質として捉えたが、焼成不良の須恵質の可能性がある。土師質土器杯および皿・小皿の底部の切り離し技法はすべて回転ヘラ切りで、切り離したあと粗い板ナデもしくはナデを施す。

東州津遺跡から出土した杯は形態から3タイプに分類することができる。これから土師質土器杯の記述に際しては、下記の分類に沿って行う。

杯Aは、体部が外上方へ緩やかに内彎あるいは直線的に立ち上がり、やや器高が高いタイプ。杯Bは、体部が外上方へ直線的に開くタイプ。杯Cは杯Bより体部が外上方へさらに開き、器高が低くなるタイプである。

杯Aは99～101、杯Bは102～105、杯Cは106～112が該当し、杯Cのうち108・109・111の3点は皿の可能性も考えられる。

皿は3点図化でき、そのうち112・113の2点は脚付皿である。113は脚部と皿部の接合後、皿部の底部に『×』の記号文が描かれる。125は脚部として、126は柱状高台として捉えた。

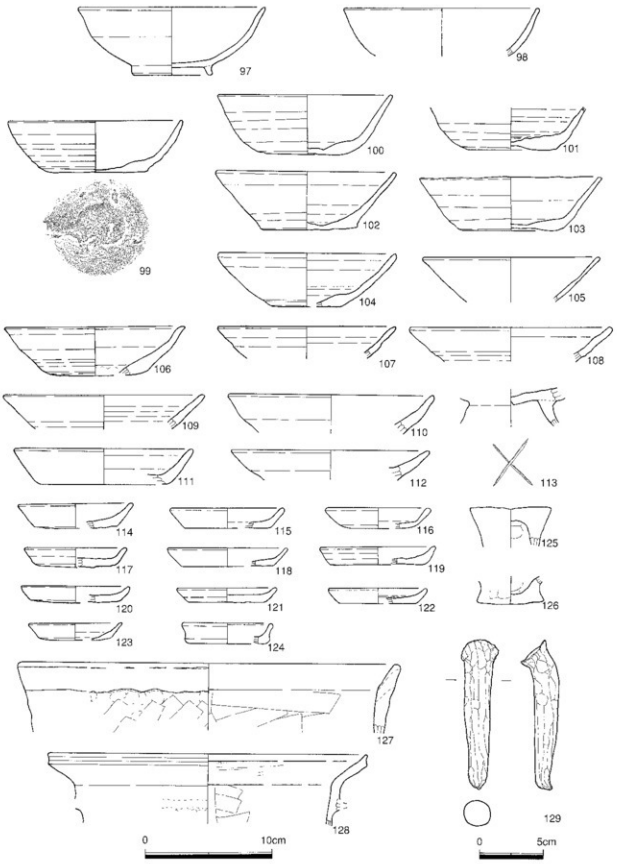
127は土師質土器鍋で、内外面共に煤状の炭化物がやや多く付着する。128も土師質土器鍋として捉えた。遺存状態が悪いものの口縁端部に凹線を巡らせ、体部に貼り付け突帯の痕跡が認められる。

黒色土器は全般的に磨滅のため調整不明瞭で、椀（130～136）・杯（137）・小椀（138）の9点図化できた。調整は130・132・138にミガキが、134では板ナデの痕跡が認められる。内外面共に炭素吸着が認められるのは、130・131・134・136～139の7点である。

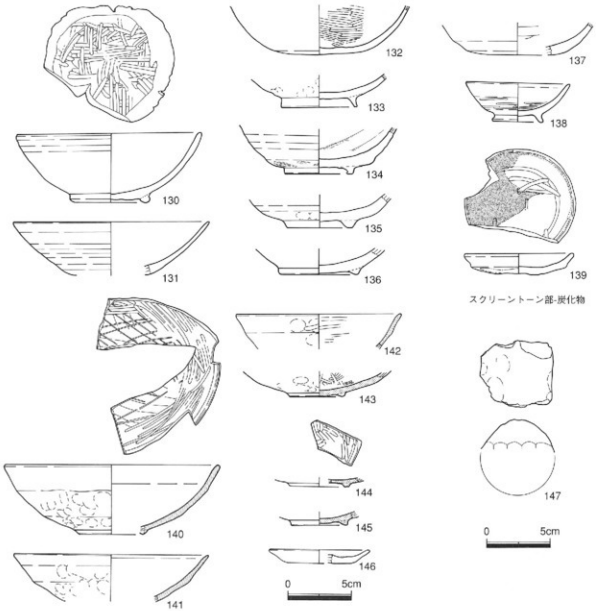
瓦器は8点図化できたが、145・146の2点は瓦器でない可能性がある。139は内面に煤状の炭化物が付着していることから、灯明皿として使用された可能性が考えられる。140は外面口縁部に重ね焼きによる黒色帯が認められ、内面では格子目状の暗文が認められる。

147は遺存状態が悪いものの、復元径6㎝弱の羽口である

須恵質土器のうち椀は27点、杯は7点、皿1点、小皿1点が図化できた。椀は、西村系須恵器椀である。椀は、内面の調整から3つに分類することができる。Aは、内面に板ナデ・ナデの後にミガキを施すタイプ（148～153）。Bは板ナデ・ナデで調整が終わるタイプ（154～164）。Cはハケメを施すタイプ（165～170）である。Aをもつ椀は全般的に器高・高台高が高く、体部が内彎しながら立ち上がるのに対し、B・Cをもつ椀は体部が外上方へ開き気味に立ち上がり、器高および高台高の低いものがある（157



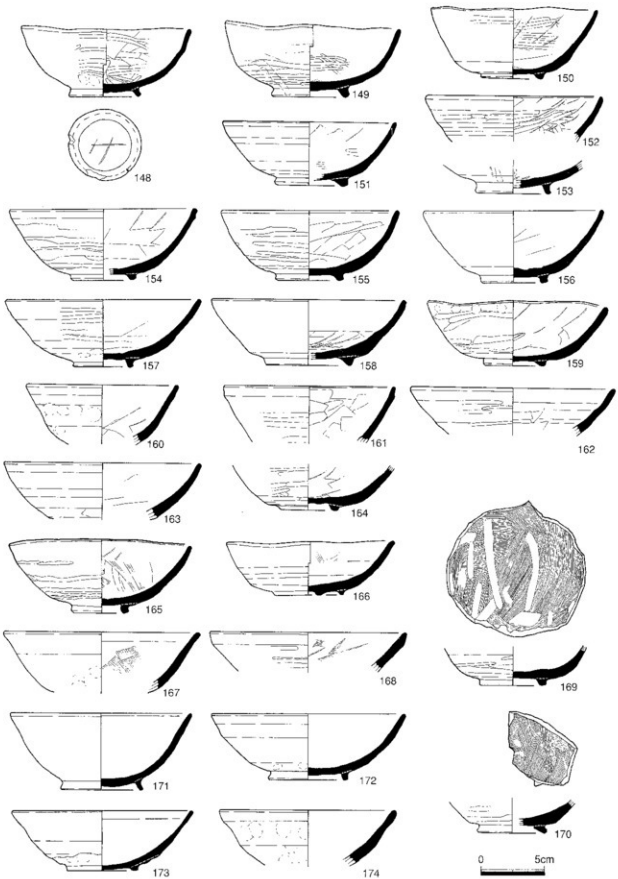
第110図　00－2区包含層出土遺物(1)



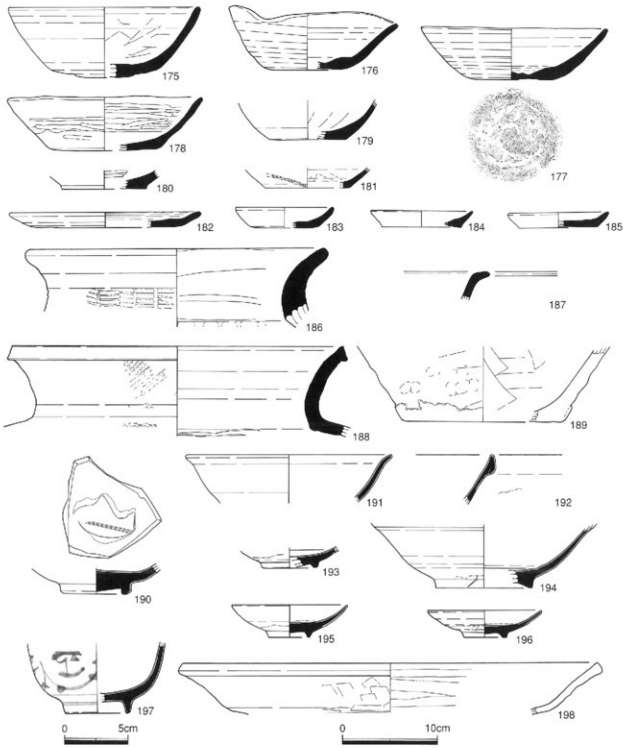
第111図　00－2区包含層出土遺物(2)

～159・230)。171～174の4点は調整不明だが、内面の調整に関しては171はA、172・173はB・Cを施す可能性がある。またミガキに関して、ミガキ幅の一定しないものがある（149・154・159・169)。148の外面底部に記号文とおぼしきものが認められるが、板ナデの痕跡の可能性もある。149はやや軟質焼成で、内外面に火襷が認められる。151では高台部を容易に貼り付けできるように、底部に高台部の部分だけ凹みが認められる。159の高台部の平面形態は、円形ではなく隅丸方形である。161・168の2点は口縁部の形態がやや異質で、他のものはそのまま丸く収めるのに対し、口縁部が直立ぎみに立ち上がって面を形成する。165・167・168・171は、外面口縁部に重ね焼きによる黒色帯が認められる。

須恵質土器杯では、175・179が内面に板ナデ、178では内外面にミガキ、180は内面にミガキが施される。181は硬質焼成で、内外面に火襷が認められる。180を除く6点は、底部回転ヘラ切りである。



第112図　00－２区包含層出土遺物(3)



第113図　00－２区包含層出土遺物(4)